明治四十一年六月二十日發行

（明治二十年十一月本會創立）

婦人衛生雜誌

第二百二十三號

私立大日本婦人衛生會

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
每月一回二十日發行
內務省許可明治二十一年二月二十八日

婦人衛生雜誌

第貳百貳拾參號目次

講演

○小兒の皮膚病　醫學士　志立宮松君講演

叢談

○美しき皮膚　H、K、君

○活ける家（續き）　醫學士　渡邊房吉君

○卒中の話（續き）　醫學士　Z、H、君

○衛生生活の一日（續き）　東京醫科大學　A、B、君

○通俗花柳病談（續き）　東京醫科大學皮膚科　筬岡芳名君

育兒

○小兒の泣く事　醫學士　河野衛君

講義

○衛生學大要（承前）　醫學士　河野衛君述

質疑

○肥滿に就て○「レスピラートル」及肺二口蟲病に就て○小兒のホヤケに就て

雜報

○コッホ博士○衛生史編纂の成績○東京市と撒水○麥食の奬勵

大日本婦人衛生會記事

○本會六月例會○山形支會總會○地久節祝賀式○本會入會者○山形支會入會者○轉居等

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆我等婦人のもつぱら掌るべき所其責任亦重しと云ふべし今や婦人の會合相謀て起り婦人社會も漸く其面目を改めんとするは誠に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひに相研究し尚之を筆記して冊子となし會員に分ち聊か同胞の爲めにすあらんとす茲に本會旨趣の梗概を敍べて廣く江湖の諸愛姉妹に告げ其贊成を仰ふぐこととしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要（明治廿二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり

●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く

●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

●第四條　入會の所は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續登本に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし

●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ケ月金三拾錢以上、通常會員は一ケ月金拾五錢を納むる者とす

●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる者は役員の協議に依り無會費とすることあるべし

●第七條　會員は本會に於て每月發刊する雜誌を無料にて贈ることを得

●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず

●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を推し、皇族の妃殿下に願出るものとす

●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長二名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名

●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし

●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす

●第十三條　臨時指名委員の件

●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ケ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す

●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す

●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外每月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし

●第十七條　例會學識經驗ある人々に衛生上の講話演說談話を嘱托し會員をして隨意聽講せしむるものとす

●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（但衣服は總て質素たるべき事）

●第十九條　評議[illegible]は男子の傍聽を禁ず

●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと

●第廿一條　每年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし

●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす

●第廿四條　會計は一ケ年每に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會

●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得

●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することと定め支會の規定に依るものとす

●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得

●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其實費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同し

●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

●雜件

第三十條　本會は每月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし

●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄附する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄附者の姓名及品目を雜誌に登錄し併て本會雜誌を以て報告すべし

●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に返信料を添へらるべし（郵券は一割增）

●第卅三條　會費は東京府下に限り每月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（麴町區富士見町郵便取扱所宛）振出しあるべし

●第卅四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は屢會費を怠り催促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市麴町區富士見町二丁目廿二番地

私立大日本婦人衛生會

○役員姓名

總裁　東伏見宮依仁親王妃　周子殿下

會長　侯爵夫人　鍋島榮子

副會長　男爵夫人　濱尾作子

（いろは順）

幹事　鳩山春子
同　羽田三緒子
同　岡田錦子
同　高木かう子
同　山本多穗子
同　松平芳子
同　三浦敬子

評議員　石川貞子
同　岩下ゆか子
同　濱田捨子
同　長谷川仲子
同　仁禮壽賀子
同　西升子
同　穗積歌子
同　土肥多越子
同　緒方悅子
同　岡山とし子
同　小川孝子
同　男爵夫人　加藤鈴子
同　片山龜子
同　吉武輝枝子
同　丹波貞子
同　高橋孝子
同　田村きよ子
同　男爵夫人　南部限子
同　中濱芳子

評議員　山口貞子
同　子爵夫人　松井正子
同　岸澄子
同　三宅藤子
同　宮本樂子
同　宮下咲子

●支會、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

〰〰〰

本會特別贊成員

（●は本會の爲め講演又は執筆せられし諸氏）

醫學博士　●入澤達吉君
理學博士　●飯島魁君
ドクトル　●伊澤信平君
●色川圀士君
醫學博士　●伊東祐彦君
ドクトル　●飯盛挺造君
醫學博士　●伊藤隼三君
理學博士　●石川千代松君
赤十字社內科主幹　●岩井禎造君
醫學士　●石原久君
醫學士　●磐瀨雄一君
醫學士　●石原喜久太郎君
貴族院議員　●濱尾新君
醫學博士　●濱田玄達君
法學博士　鳩山和夫君
●萩原彌四郎君
東京　●芳賀榮次郎君
醫學博士　●長谷川泰君
●長谷川一詮君
新潟　●小原釧之君
小兒科　●岡田榮吉君
醫學博士　●林春雄君
醫學博士　●佐藤達次郎君
醫學博士　●緒方正規君
醫學博士　●堀內文次郎君
步兵中佐　●堀內文次郎君
醫學博士　●土肥慶藏君
醫學博士　●岡田和一郎君

醫學博士　●大澤謙二君
醫學士　●大西秀治君
醫學博士　●大澤岳太郎君
一等藥劑官　●恩山重信君
醫學士　●若杉喜三郎君
醫學士　●渡邊房吉君
男爵　●加藤弘之君
醫學博士　●加藤照麿君
醫學士　●賀古鶴所君
醫學博士　●河本重次郎君
醫學博士　●片山國嘉君
醫學士　●川上雅升君
醫學博士　●櫻田鶴一郎君
醫學博士　●金杉英五郎君
醫學博士　●笠原光興君
醫學士　●唐澤光德君
醫學士　●河野衛君
醫學博士　●高橋順太郎君
ドクトル　●高山紀齋君
醫學博士　●高木兼寬君
法學博士　●高木豐三君
醫學博士　田代義德君
新潟　●田代亮助君
男爵　●高崎正風君
醫學士　竹中成藏君
醫學士　●高田耕安君
新潟病院長　●高橋辰五郎君
藥學博士　●丹波敬三君
醫學士　高橋貞丙君
藥學博士　●田原眞純君
醫學士　●山村光顯君
醫學博士　●久保猪之吉君
醫學士　●米山彥郎君
二等軍醫正　●星野篠光君
醫學士　●宮本叔君
三等軍醫正　●横井忠岡君
大日本教育會長　辻新次君
理學博士　●坪井正五郎君
醫學博士　●長與稱吉君
男爵　南部甕男君

藥學博士　●長井長義君
醫學博士　●遠山椿吉君
醫學博士　●中濱東一郎君
醫學士　●黑田玄通君
醫學士　●栗本庸勝君
海軍中佐　●小笠原長生君
醫學士　村松鍬三君
醫學博士　●隈川宗雄君
醫學博士　●栗本東明君
醫學博士　●山田鐵三君
醫學士　山田弘倫君
醫學士　●山根正次君
岡山　●山川春二君
衛生試驗所技手　●丸山長四郎君
ドクトル　●松山陽太郎君
ドクトル　●小此木信六郎君
盲啞學校長　●小西信八君
廣島　小泉賀君
醫學士　●古川榮君
東京　布施正顯君
南滿洲鐵道總裁　●後藤新平君
元帝國大學教授　●エ、ベルツ君
醫學士　●中野榮君
文部視學官　●寺田勇吉君
醫學士　●寺田曉作君
醫學士　●寺田織尾君
子爵　●秋元興朝君
前軍醫總監　●足立寬君
ドクトル　●新井古芳君
ドクトル　●富士川游君
高崎醫會長　土谷全次君
產科婦人科　●水原漸君
ドクトル　●久保田誠應君
醫學博士　●佐々木政吉君
醫學士　●淺田決君
醫學博士　●朝倉文三君
ドクトル　●朝山義六君
醫學博士　吾妻勝剛君
醫學博士　●佐藤三吉君
醫學士　●櫻井郁二郎君

ドクトル　佐伯理一郎君
醫學博士　●榊順次郎君
醫學博士　●榊保三郎君
醫學士　●佐藤得齋君
醫學博士　●櫻井恒次郎君
醫學博士　●桐淵鏡次君
醫學士　●北村精造君
醫學博士　●北島多一君
ドクトル　●北川乙治郎君
醫學博士　●木下正中君
醫學士　●北島小太郎君
醫學博士　●北里柴三郎君
醫學博士　●三浦守治君
醫學博士　●三浦謹之助君
小兒科專門　●宮本仲君
理學博士　●箕作佳吉君
醫學博士　●三島通良君
醫學博士　●三宅秀君
醫學博士　●三輪信太郎君
伯爵　土方久元君
醫學博士　●島村俊一君
醫學博士　●弘田長君
ドクトル　●日高昂君
ドクトル　●須田卓爾君
醫學士　●澄川德君
醫學博士　●木村德衛君
醫學博士　森林太郎君
醫學士　●笹川三男三君
醫學士　●波多野悌君
醫學博士　●吳秀三君
ミス　●リツデル
ミス　●ヒユース
ミス　●コーツ
ドクトル　●菊池循一君
醫學士　●橋本左武郎君
醫學士　●鳥居春洋君
醫學博士　●土田卯三郎君
ドクトル　●佐藤運雄君
ドクトル　●西山信光君
醫學士　●澤崎寬制君

大日本婦人衛生會

七月例會通知

來る七月四日（第一土曜日）午後一時半より神田區一ッ橋通り女子職業學校内に於て例會を開き左の講話有之候間萬障御繰合せ御知友御誘引御來會被下度候也

一演題未定　藥學士石津利作君

一身體及び其保護（續）　ドクトル富士川游君

明治四十一年六月

私立大日本婦人衛生會

婦人衞生雜誌第二百二十三號
（明治四十一年六月二十日發行）

講演

小兒の皮膚病

醫學士　志立富松君　講演

今日は先達て濱尾男爵夫人から朝倉博士夫人を通して、私に此會で何か一つ話をして吳れろと云ふ御話がありまして、何か適當なる問題がありはしないかと考へましたが、どうも他に私等の專門の方で面白い御話もないから小兒の皮膚病と云ふ演題を揭げた譯であります、それで此婦人衞生會のやうな御婦人だけお集りになる會では餘り演說したことがありませぬし、又從て題目を撰びまするに色々困難した譯で御座いますが、先づ一般に既に家庭に入つて居らつしやる、子供を育てゝ居らつしやるお方もありますし、それから又將來家庭に入つて、さうして良妻賢母と成つて社會に活動しやうと云ふ皆樣の前では、一番小兒のことに就て御話をした方が有益であつて、さうして皆樣に極く適切であらうと思ひましたから、斯う云ふ題を揭げました。

先づ種痘のことを一寸お話します、種痘と申しますと、此間も東京で大分流行ましたが、幸に政府の盡力で餘り猖獗を逞うせずに濟みましたが、此種痘は色々方式がありまして、三島式とか何式とかありまして、其式は何れにしましても唯通常の場合に於ては少しも差支はない、所がそれが只だ一箇所種痘をした許りでなしに身體中に擴がるやうなことが偶にある、それで其統計を取りますと兎に角さう云ふやうに種痘が全身病となりまして、身體中に擴ると云ふことは極めて僅かであるけれども、例へば五十萬人に六人乃至八人の割合と云ふ統計を出して居る

人もあるし、或は三十一萬人に六人と云ふ統計を出して居る人もあるし、或はホイトなどの統計では十萬人に十七回、是等は大分割合が多くなつて居る、それで詰り種痘をやりますと其種痘の所ばかりに止つて居なくつて、顔とか身體とかに種痘が擴がる、それで今一つの例を申ますと、嘗て獨乙の動物學の大學の教授で自分の子供がさう云ふ種痘の爲めに全身に擴つて、其結果眼まで疱瘡がついて詰り眼の結膜に種痘が附いた爲に失明をして仕舞つた、動物學の先生だから未だ餘りさう云ふ事を知らなかつた、所が疱瘡でも馬鹿にはできない、自分の伜が其爲に眼が無くなつて仕舞つた、それで非常に殘念に思つて、斯う云ふ例が今までに醫者の歴史にあるかと思つて段々調べて見ました、元來動物學者でありますけれども自分の伜がさう云ふ目に遇つたから遺憾に思つて色々醫者の本を調べて見た所が醫者の本にもさう云ふ例が報告してある、それであらゆる例を集めましてそれを醫者の雜誌に報告した、それが著しい例でして、詰り專門家ではないけれども自分の伜を思ふと非常に口惜しくつて仕方がないからして一生懸命に成つて材料を探して報告までした、私が西洋で見ましたのも矢張り一二例ありますが、其一つは私の先生の病室へ入つて來た患者があつたが、それが何だか顔が腫れて居つた、始めは診斷が付かなかつたが併しどうも疱瘡のやうな膿疱疹、即ち膿を有つたポツ〳〵が出來て居つてそれがどうも疱瘡のやうである、それで始めには其兩親が附いて來たから、それに聞いたけれども疱瘡などはないと云ふから分りませぬでした、診斷を分らず仕舞でやつて居つた所が、四五日經つて或日助手が子供の手を見た所が此手に立派な疱瘡の痕が殘つて居つた、成程兩親と云ふのは百姓で極く無智の者でしたから此方の云ふ事が能く分らなかつた、それでさう云ふ間違が起つたのであるが、それから疱瘡が擴がつたと云ふことが分かつた、顔中疱瘡が出來て居る、さう云ふ工合に疱瘡が全體に擴がることがある、それは

どう云ふ譯で擴がるかと云ふに、詰り二つの説がある、一つは疱瘡の毒が體内を廻つて血管の中に入つて身體中に擴がる、即ち中からして擴がるといふ説と、一つは外からすると云ふのである、それは腕に附けた疱瘡を子供が知らずに搔いて其指で顔とか身體とかを搔くから感染る、即ち自分の指から感染ると云ふのである、是は何方が宜いか分りませぬ、片方の身體の中からして行くのではない、外からして指で感染すると云ふ方の派の人は色々自分の方の論を確かめる爲に種々なる説を立てゝ、何故ならば身體に指の屆かない所がある、例へば兩方の肩胛骨の間、是は吾々が搔かうと思つても搔けない、さう云ふやうな部分には決して種痘の膿疱疹が出來ない、それは詰り指で感染す證據で、指の達する限り何處でも痒ひ所があれば搔く、それで其處へ感染る、手の屆かない肩胛骨の間とか云ふやうな所は決して疱瘡が出來ない、だからして中から行くのならば身體の中、何處へでも出來なければならぬけれども、指で感染すのであるから、手の屆かない所には決して行かないと云ふて居る、所が又反對の血液の方から行くと云うて居る人の説も種々あるが、何方にしましても斯う云ふ酷い事がある、それはどう云ふ譯で起つて來るかと云ふと、多く濕疹が出來ますとか、或は疥癬であるとか、詰り痒いものが出來て居るとそれが元になつて身體に感染す、例へば疥癬が指にあるとか、或は足に濕疹、雁瘡のやうなものが出來て居れば種痘を搔いた手で其部を搔き亦近所を搔くからである、でありますから子供が痒い皮膚病を有つて居つた時には種痘を成るべくさせないが宜いと云ふことを注意しなくてはいけない、それ等は親が注意しなくてはならぬ、子供の頭には能く濕疹が出來る、それでさう云ふ場合に種痘をしますと、之を搔いた手で頭を搔くので酷い目に遇ふ、さう云ふのは兎に角稀であるけれども、さう云ふ事があると不愉快で、甚しきは眼が潰れることがある、あまりまだ云ふやうなことが日本では知れて居りませぬ

し、又種痘する醫者なども注意して居りませぬけれども、さやうな場合には注意をしなくてはいけない尤も此間のやうに天然痘が流行するとか云ふ時には是は例外であつて、子供の親としてそんな極めて稀に起る場合を想像して種痘をしないと云ふ譯には行かない、若し此天然痘に罹つたりすれば大變であるが、通例の場合に子供が痒い病氣を有つて居る時は種痘は成るべく避けて、さう云ふ病氣のない時を撰んでやらなくてはいけませぬ、つい此間の獨逸の雜誌にも是と同じやうな例が三ツ四ツ報告してある、其患者等は熱が非常に出て、中には顔中一杯に出來たものですから淋巴腺が腫れて膿んで仕舞つたり又面白いのは子供の御母さんの小指に膿疱疹が出來て居つて、能く診た所が矢張り疱瘡であつた、それから其お祖母さんにも感染つた、さう云ふやうに疱瘡と云ふものは感染り易いものですから、子供の頭に何か出來て居れば身體全體に感染ると云ふ事は極く有勝ちのことである、斯う云ふやうな事は餘り皆樣が御承知ありますまいと思ひましたから、御參考の爲に申上げました。

それから次には子供の濕疹のことです、頭等に能く出來ます所謂脂漏性濕疹で、子供等には非常に澤山あつて、私等の扱ふのは子供が一番多い、是は此前此處で百瀬君が演説された事がありましたが、多分其時にお話があつたかも知れません、脂漏性濕疹と云ふのは生れ立てから一歳二歳位の子供に一番多い頭一面に出來て汁がジク／＼出て來る、此病氣は昔からあるので俗に色々の事を言ふ、例へば之を治すと身體の中に毒を追込んでいけない、却てかまはんで置くと其内に治る、藥で治すると身體に毒が入つて子供の爲に惡いなどと言ひます、私の友達で其子供が矢張り四五年前に此病氣になりましたので私の所へ來ましたから治療をしてやつた、其時にはお父さんも大分擔ぐ人でどうも餘程考て居つたけれども治らぬので私の所へ遣したのです、さう云ふ工合に多くの人は却て追込むから治さない方が宜い

と云ふやうな考を有つて居る、それは間違つて居る間違つて居るのみならず其様な工合にして置いては子供がたまらない、何故かと言ふに、皮膚病の常として非常に痒いから子供が夜分睡れない、醫者は時時診るから宜いやうなものゝ、兩親になつて見ると始終子供に附て居るのですから毎晩々々睡らないのではたまらない、子供も夜睡れませぬから段々と榮養が衰えて來る、だからさう云ふ迷信をせずに醫者の所に遣つて治さなければならない、さう云ふのは隨分長く續きます、偶には一ケ年位も同じ病氣で醫者の所へ通ふやうなことが出來る、私も今もさう云ふ患者を有つて居ります、此患者は未だ一歲未滿位のですが、そのお母さんが非常に若いのでどうも看護が行屆かない、家へ歸ると私の言つた通りにやつて居ない、例へば子供の頭だけではなしに顔にも出來ますと仕方がないから、眼と鼻と口を出して繃帶をしてやる、一見誠に慘酷のやうで子供には氣の毒ですが、さうしなくては治らないから仕方がない、

すると丁度春のことですから外を歩くのにあの子供は疱瘡をして居ると言はれて困ると、其様な事を私の所に言つて來ます、人が何を言つたつて構はない治るのが一番宜いからさうしてやる、大尉始めの中は良かつたが段々に時候が暖かくなりました、暖くなると總ての皮膚病は惡くなるのです、所でお母さんがまた誠に若いので充分に母として資格は聊か怪しい年齡ですから、子供にドッサリ著物を著せて汗ビッショリになつて居る、其様に著物を著せてはいけないとやかましく言つて居るけれどもどうしても聞かない、尤もお母さん自身が來ないで何時でも子守が脊負つて來る、幾ら此方からやかましく言つても聞かないから其儘にして居るが、どうも充分に治らない、是等は好い適例で醫者の藥は良くつても母親の看護が充分に行屆かないと、皮膚病と云ふものは決して治るものではない、唯服藥位では誰でも治らぬ、膏藥を附けましても充分に當つて居なければ何にもならない、さう云ふやうな工合で素人に治

療が出來ませぬから、どうしても醫者の所に送らなければならない、能く素人は亞鉛華澱粉を塗る、是は大抵の素人は知つて居ります、まア亞鉛華でも塗つて置けと云ふやうなことを言ひます、所が之に就て面白い例を知つて居る、是は子供では無かつたが二十歳位の青年でしたが、顏中皮膚病が出來て私が行つて診ました所が矢張り濕疹で、鼻のやうな膿がジク／＼出て來る、今迄醫者にかゝつて居つたが其處へ亞鉛華澱粉を塗つたからそれが固つた、其固つた上に又塗るから堅く成つて仕舞つて段々瘡蓋のやうにくつゝいて仕舞つた、其樣な治療をしたのでは無論治らない、早速油を附けて油で瘡蓋を取るやうにしてやりました所が直ぐに治りました、大人のは治療がし易ひ、子供のは物が分らぬから膏藥を附けて置ても手が屆くと掻くから誠に困る、私が西洋へ往つて居りました時に、彼方でもさう云ふ患者が澤山ありましたが彼方では寢臺だから子供を寢かして兩方の手を縛り附けて仕舞ふ、子供が幾ら痒くても掻くことが出來ない、兩親などではさう云ふ事は出來ませぬから入院させなくては駄目です、どうも子供の皮膚病と云ふものは治療が難かしい、一歲位の中はまだ宜しいが三歲四歲位に成ると手は動くし譯は分らぬし一番醫者が困る、斯ふ云ふのは兩親の看護が宜くなければいけない。

本題に立歸りまして此脂漏性濕疹と云ふものは頭からして耳の方へ出來まして、それから顏面へ擴がります、顏が一番重でありますが身體にも擴がることがあります、是等は極く出來立ての中に所置をすると、直に治つて仕舞ふのであります、大抵醫者の許へ駈付ける時には餘程大袈裟に成つて、自分に持てあまして醫者の所へ持つて來るのが多いから、中々治らぬと云ふやうなことになる。

それから次は汗疹のことです、是は段々暖かになると出來るのですが矢張り濕疹の原因に成りますので極く適當な藥があるから面倒臭いことをしなくとも例へばホルマリン等の極く薄いのを付けますと直き

治ります、あれ等は矢張り、餘り厚著をさせると段段さう云ふものが出來て仕舞には濕疹の原因に成りますから、是等も極く始めの時に亞鉛華澱粉でも塗つて置けば治りますが、大きく成つては素人ではいけなくなります、次には所謂飛火、是は御承知で御座りませうが、五六月頃から夏にかけて盛んで始め膿を有ちまして乾くと瘡蓋に成つて、殊に顋の邊りに澤山出來ます、是は一種の黴菌に因て出來る、其黴菌は何であるかと云ふことは未だ日本にも西洋にも分つて居りませぬ、兎に角傳染する、直接傳染、即ち其膿が付けば其處に傳染すると云ふことが明かであります、さう云ふのは極く小さく二ツ三ツ位出來て居る時に硼酸軟膏などを付けると直き治る、所が注意を怠つて段々大きくなり一ツ二ツのが一緒になる、さうして大きい面を拵へて黄色を瘡蓋が出來る、それから次は白雲です、是は白雲頭と云ふて大抵商家の丁稚等にはあるやうに言つて居りますが良家には餘りありませぬ、矢張り貧民の子供に一番澤山あります、京都邊りに行くと非常に多い、京都でなくとも東京でも貧民窟へ行くと澤山ある、白雲と云ふ名の通り頭の一部分が丸い形をして白くなる、さうして雲脂のやうなものが取れる、之に就ては私の友達で三等軍醫正の山田弘倫と云ふ人が大分調べまして、其原因に就ても略ゞ分つて居ります、是等は小學校等で子供がお互に角力を取つたり何かして子供から子供に感染て流行を來たすのである、一小學校に於て子供が非常に澤山罹るやうな例があります、それで良い處のお子さんには割合に之に罹らないと云ふのは總ての近所が良いからであります、是も治ると云ふ事に就ては困難である、中々一寸は治つても暫く經つと又出來て、其酷いのになると其處だけ痕になつてボツ／＼と禿げて毛が生えないから禿がドッサリ出來ます、さう云ふのも親の不注意からである、成長しても永久に瘢痕が殘つて子供に取つては氣の毒な事でございます、是等も注意しなければならない。

次には疥癬です、疥癬は御承知の通り濕瘡です、是も矢張り貧民に多いのですが良家の子供にも隨分出來る、と云ふのは矢張り學校で感染ります、それから又内では子守とか下女とかゞ有て居ることがある、良家の子供に感染るのは大抵内の下女とか子守とか云者からであります、是は御承知の通り最初指の股に出來る、それから身體に段々擴がつて行く、是は疥癬蟲と云ふ一ツの蟲がある、今日圖を持つて來ませぬでしたが、顯微鏡下で見ますと可成り大きい蟲で足が澤山ありまして恐ろしい恰好をして居る、それが上皮の中に……此所から此所までを上皮と云ふてこれから下を眞皮と申します（圖指示）、例へば同じ傷をしましても淺い傷、眞皮まで往かない傷であると決して痕が殘らない、所が最少し深く切つて斯う云ふ工合に成つて居る乳頭まで入ると瘢痕に成つて何時まで經つても消えない、疥癬と云ふものは眞皮までは入らない、上皮殊に角質層に入り込む、隧道のやうな穴を穿つて其處から入りまして、始めは斯う云ふ所に居りますけれども、段々仕舞には一番附つこに入つて此處に居る、一度おやりになつた人、或はさう云ふ病人を御覽になつた人は分りませうが能く御覽になると膿を有つて居る所があつて其處に斯う云ふ黑い筋が見える、其筋が卽ち隧道であります、皮膚を透徹して見ると黑い筋のやうな其一番先きに蟲が居ります、此處に居るのは女であります、疥癬蟲の女が斯う云ふ工合に隧道を穿つて此中に入つて居るのが此女蟲の方が非常に男蟲から見ると大きい、男の方は此穴の近所に住つて居つて主として女の方が斯う云ふ仕事をやる、さうして卵を此中で產む、卵は何の位生むかと云ふと、一日に一ツ產むと云ふ人と、二日に一ツ宛產むと云ふ人とありますさうして全體の卵は五十位一定の蟲で產むが全然自分の生殖作用が終ると一番先きの方で死んで仕舞ふ是は御承知の通り非常に痒いものであります、だから斯う云ふのは成るべく早く退治して仕舞はなくてはならない、西洋などでもどうも勞働者に澤山ある

西洋ではさう云ふ者が來ますと疥癬の治療と云ふて一定の治療をやります、之をクレッツクールと申します、私の居りました教室等では、先づ是等の患者が來ますと勞働者の事ですから實に汚い著物を著て居りますから、其著物をスッカリ脫がせまして湯に入れます、此の治療に一番必要な事は藥を附けるよりも先づ其前に湯に入れる事である、湯に入れて大きなブラッシの毛の硬いのを以てスッカリ擦る、さうして皮が剝けて痛い位に掃除させまして、其間に一方は著物を消毒するのです、百度まで熱しなくとも大抵七十度位に熱すると疥癬蟲は死んで仕舞ふ、是は皆官費でやつて居るのです、で斯う云ふやうに消毒しないと又著物から感染する憂があります、それから湯から上つて來ると膏藥を身體中塗てやる、大抵硫黃軟膏四十％位の强い膏藥を塗つてやる、さうすると大概一回で治つて仕舞ふ、勞働者等は度度病院に通ふなどと云ふ事は出來ませぬから、少し位荒療治でも早く治さなければならない、だから斯う云ふ强い膏藥を附けて、一度か多くも二度位やれば治るやうな仕組になつて居る、吾々がやるのも始め患者を湯に入れまして次に藥を附ける、併し一番困るのは著物の消毒です、善い著物を著て居るのが最も困る、下著は消毒させますけれども上著になると値段も高くあるし、消毒させると品質が痛みますから非常に不都合です、とは言へ元の著物を著て居ると何度治しても後から〳〵起つて來ます。

其次は禿頭ですが俗に之を臺灣坊主と申します、元と臺灣から來たのかどうかは知りませぬが、矢張り西洋にもあります、是は子供計りではありませぬが、併し一家の主婦としてお立ちになるには非常に必要であらうと思ひますから、序にお話申します、是は頭の上が圓く禿げる圓形禿髮と醫者の方では申します、其禿げた中には毛が少しもない、或は一晩で出來たりする、多くの患者が申しますには、先生散髮屋へ參りましたら斯う云ふものが出來ましたと云ふがそれは能く分りませぬ、散髮屋で毛を短く苅つた

からして始めて分つたのかも知れない、然らば何故に起るかと云ふ事は分りませぬ、其處に黴菌が感染して生ずるものか、或は其部分の神經の榮養が衰へて皮膚が禿げるのか確とは解らぬ併しながら解らない以上は傳染するものとして取扱つて置けば間違はない、人の帽子とか櫛とか云ふものは氣を附けなければならぬ、それで是は一度出來ますと中々治らない、直ぐ治る人もあるが性が惡いと中々治りませぬ、そうして頭中擴がつて仕舞ふのでありますから、婦人は殊に氣の毒であります、私の知つて居る女子高等師範の生徒でありますが、其人は餘程激しかつた爲め頭の大部分に擴つて居りました、あゝ云ふ學校に居りますと、どうもさう云ふものが出來ましては、友達に對しても非常に工合が惡いし、又寄宿舍の方でもさう云ふ者を一緒に置くと云ふことは非常に工合が惡いので、學校を止めて鄕里に歸つたやうに記憶して居ります、さう云ふ不幸なことが起つて來ます、それも性の善いのだと直きに治りますけれども

性の惡いのに成りますと段々擴がつて往つて、眉から鬚から頰髯等もスッカリ脱ちて仕舞ふ、併し原因が分らないし、今の處で誠に醫者も仕方がない、併しながら仕方がないと云つて其儘に放任して置ては際限がないから、出來るだけ力を盡し、細菌も死ぬし又同時に毛も生えると云ふやうな、刺戟劑を使ふと云ふ方針になつて居ります、で普通のは大抵治ります、成るべく擴がらない中に手當をしませぬと如何が分りませぬから治し難い、段々原因が探究されて見れば、或は黴菌で起るものかも知れませぬ、だと云ふ早い中に治療しなくてはならない、それで四五年前に臺灣坊主々々と云つて、一時に流行するやうに吹聽した時代がある、それは恐らく其時代の人が始めて注意しだしたので、實に其前からあつたのであらうと思ひます、其時分から私の知つて居る家では、其家の子供を妻君がスッカリ散髮してやる、始めの内は隨分下手のやうでしたが、什舞には慣れて餘程上手になられたやうです、さうすれば一番確

かです、マアさうしなくても散髪をした後では十分に洗つて、さう云ふ危險を未發に防ぐやうにしたいと思つて居ります、此他俗に鮫肌と申します、あれは小兒のみではありませぬが、先天的のもので生れ立てから既にある、だから如何に治しても先天性の畸形、片輪と同じことで治りませぬ、治らないけれども、ザラ〳〵しまして非常に不快である、何とか方法があつたならば治して貰ひたいと思つて吾々專門家の處へやつて來ます、さう云ふのはどうも仕方がありませぬが、斯う云ふのも何か油を附けて、或は豚脂――豚の脂とか或は軟膏とか或はワゼリンとか云ふものを附けて置きまして、皮膚を軟かにすれば幾分か不愉快を免れる、さう云ふのは冬になると益々烈しくなる、殊に皸等に能く切れる、斯う云ふのは屢々湯に入つて、湯から上つたならばワゼリンとか豚脂とか云ふものを附けて置く、さうすると幾分か先天的の一種の畸形を輕くすることが出來る、それからもう一つ御話をしますのは、痒疹……プルリーゴーである、是も矢張子供の時からである、私の友達の子供等にもありました、是は重に足に出まして、殊に裏側でなしに表側の方に出來ます、手も矢張さうです、重に足が多い、二歲位の子供から出來て、非常に痒いポツ〳〵が出來る、餘り痒いから痒疹と云ふ名が附いて居る、是もなか〳〵治りませぬが、男でも女でも十分發達し切りますと、其時分に身體が多少變るものと見えまして其時に治る人が多い、自然に治つて仕舞ふ、弱い子供の方が多く罹ると云ふ人もありますし、或は壯健な人でも罹ると云ふ人もあります、其邊は能く分りませぬ、兎に角さう云ふものが出來ますと、子供が非常に痒がつて其爲に眠られないで子供の榮養が非常に衰える、是をスッカリ治して來年起らないやうにすると云ふことは今の所では出來ない、併し痒いのをとめて、さうして子供が痒い爲に眠られないとか何とか云ふことを、其時だけ治してやることは出來ます、所が來年の春になると又出て來る、さうすれば同じ方法を

繰返すに過ぎませぬけれども、子供の榮養と云ふものは妨げられませぬ、平素肝油を飲まして置きますとか、其他の滋養分を取つて身體を丈夫にして置く、或年齡が來ると幸ひな時には治ります、男は二十歳ぐらゐ、女は十六七位になりますると大抵身體が變化する、其時分に奇體に治ることが度々ある、それまでは年々出來るが、どうしても醫者の力で治すと云ふ譯には行かない。

今日は是だけ、まだ色々ありますけれども、子供の皮膚病として御話する重なるものは大抵此樣なものであります。

叢談

美しき皮膚

H、K、君

我國の婦人は歐米の婦人が盛裝した時の樣に腕や胸をあらわに現すと云ふ樣な事はまだ一般には行はれませぬから、身體のうちで直接皮膚を外に顯はすのは襟より上と兩手位なもので全體から見ればホンの一部分に過ぎないのですが、夫でも之が人の容姿の美に對して關係を持て居る事は實に非常なものであります。容姿の何程美しい人でも肌質がよくないと其容姿が引き立たず、之に反して肌質に申分のない人は容姿が左程になくとも誠にあでやかに見ゆるものであります。其證據には西洋の有名な文豪が美人の姿を描いた條を見まするとき姿や何かに關しては極

めて簡略にしか敍してない場合でも肌質の事だけは常に色彩の鮮かな筆つきを持て丁寧に書て居られます。

先づ肌質の大切な條件を擧げてみますとザット次の六箇條です。

（一）皮膚の色澤の鮮かなる事
（二）表面の滑かなる事
（三）皺や創痕のなき事
（四）表面程よく柔婉となりて餘り脂ぎらぬ事
（五）餘り毛深くなき事
（六）吹出物及色素斑のなき事

此六箇條の内で一番目に立つのは矢張皮膚の色澤であります。皮膚の色つやの事をお話しするには先づ其色澤の起る所以をお話しする必要があります。元來皮膚は皆樣も十分御承知の通り所によりて薄さ厚さの違はありますが通例は一分位の厚さで、何處でも上皮と眞皮との內外二層から出來て居るのであります。上皮の方は皮膚の一番外側にありまして之は稍透明になつた扁平い細胞が幾重にも重り合つたもので譬へますれば雲母を薄く剝した樣なものです。此上皮は層の下にあるものが眞皮です、之は顯微鏡で見ますると小さな波形をなして居まして、手掌や指尖に見る細かい條のその溝と小高い處とが丁度之に一致して居るのであります。此部は皮膚のうちの最も大切な分部で、溫さ冷さを辨別し硬さ軟さを觸知する神經の末端の脂を分泌して皮膚を滑かに又毛髮を養ふ脂腺、體內の不潔物を吐き出し且つ寒暖の激しき替り樣を緩かにする汗腺など樣々の必要な機關は重に皆此部にあるのです、而して皮膚自身の外猶以上の樣々な機關を養ふ養分を持運ぶ血管も亦玆まで細く振分れをして擴つて居るのです、皮膚の色艶に就て最も密接な關係を持て居るのは此細い毛の樣な血管であります。前にも述べた通り眞皮の上を包む上皮の層は人種によつて多少いろの著て居る相違こそあれ大體は半ば透明な物ですから、それで此血管の多い眞皮の層が多少外から見透かされるので

あります。仰山に申しますと紅薔薇の花瓣に雲母の片を重ねた様なものとも申しませうか、何時見ても顔の色のホンノリと薄紅色に艶のよい方は丁度之と同様な譯で十分に發達した眞皮の毛細管が清らかな上皮の層を透して彩つた自然の化粧であるのです。併し眞皮の層の血行が何程よくとも上皮が清らかでなくては或は赤黒く見えなどして決して美しくはなりません、又血行がよいと申しても之にも程度があります、充血と申しまして餘り澤山の血液が一所に集り過ぎるのもいけません、恰度おさんどんの頬面の様でも感心できません。之と同様に又上皮の方は何程綺麗に研き立てても眞皮の下の肝腎の血管が發達不十分では之も何にもなりません、若し病氣に罹るか又は空氣の惡い處に居て血行があしく血液のうちに酸素が乏しくなりますと眞皮に來る血の色も鮮かな紅いろを失つて紫がゝつた色となります、又榮養が惡しくて貧血となれば眞皮に來る血液の量も少くなり蒼白い色を呈する様になる、ですから上皮は何程綺麗でも眞皮の方で紫染みて居たり蒼白くなつて居ては之も何にもなりません。モ一ツ眞皮の下には厚い脂肪の層があります、之は皮膚の形の上には實に大なる關係を持て居るものですが又其色艶にも誠に密接なる關係があります、人體の脂肪は一般の皮膚の下では純白に心持黄味を含ませた色をして居ます、之が眞皮上皮を透して皮膚の色に及ぼす影響はそれを益ゝ白くするのですが、其白さは單に冷い白さではなく何處ともなく圓みのある温味のある白さを添ふるのであります。要するに皮膚の色艶をよくするのには上皮の層を清らかにする事と、眞皮の血行を盛んにし且つ脂肪の沈著を十分にする事の此三つの要件が相待つて始めて其目的が達せらるゝのであります。砒石と云ふものは實に恐るべき毒物ですが、歐米の婦人の内には之を化粧の目的にて内服する人が有る相です、最も習慣は不思議なものでこんな毒藥でも初めは少々宛飲み慣して行く間には終に慣れぬ人が呑んだら急に中毒を起して死ぬ位の

其分量の十倍以上を一時に飲んでも平氣で居らるゝ樣になるのです、之も長く續けて居るうちには終には種々なる恐ろしい症狀を顯しますが、一時皮膚が後に美しい色艶を出すのは此藥が血管の壁に働て毛細管の血の色をよくし一方では程よく脂肪の沈著を來たす爲であります。之によつても皮膚の色をよくするには血行をよくし脂肪の沈著を豐にすることが第一の要件だと云ふことが分ります。それでは之を實際に行ふものは如何すればよいかと云ふに、之は如何なる化粧劑を用ゆるよりも先づ身體の榮養を良くすることを勉めねばなりませぬ、規則正しい食事と運動との攝生に注意すればよいのです。フエースクリームを擦込んでおしろいを塗つて、ルージで薄く彩つたのも綺麗は誠に綺麗ですが眞の肌質が衰へて居ては何の役にも立ちません、特に化粧をして餘り手入をしすぎると却て皮膚の衰へを甚しくしますから化粧を施す前には先づ皮膚の榮養を佳くする事を考へねばなりません。

皮膚の色澤に次で大切なのはその滑かでなければならぬ事です。皮膚の粗造となる原因は毛穴の粗き質、又は脂腺の分泌が乏しくて皮膚に十分な潤澤を與へる事の出來ぬ場合、榮養不良のためか皮膚の衞生の行屆かぬためかで、表皮の細胞が順次陳き物から剝がれて又新らしい物が出る其新陳代謝が不規則に行はれて、上にある細胞が脫落して間もなく早や其下の物が剝げかゝると云ふ樣な場合である。之も身體の榮養が佳くなると從つて皮膚も美しく滑かになるものであるが又別に相當の手當を施さねばなりません。

皮膚を淸く滑かにする方法の中最も廣く用ひらるゝのは無論石鹼ですが、之もアイプリー石鹼の樣な少も刺戟の無い物を十分撰擇で用ひねばなりません、若し石鹼の内に遊離アルカリなどがありますと却て皮膚を甚しく粗くします又遊離の脂肪酸がある場合には皮膚を淸くするのに何の效がない許でなく却て之を汚くします。

其外には牛乳やベンゾインを入れた微溫湯でも洗ひますが最も手のかゝらないのはベルツ水などです。又植物酸を含んだ液汁卽ち樣々の植物の實などを潰して拵へた汁なども使ひます、是は我國でも古くから行はれて居る事でマルメロの汁や柚子の絞汁に醋を雜せて使つて居ますが此は其中に含まれて居る植物酸の働きを利用した物です。多數の方法の中で手輕で且つ效驗のあるは胡瓜水です、之は約二合許の水で胡瓜を煮出し其煮汁の中へ匙に一抔位の硼酸末を溶かしたものであります、其外又時節によりてはトマト水を使ふ事もあります、此時には顏は豫め十分洗ふて毛孔を開かした後でよくトマト汁を擦りこみ、あとは再ひ石鹼でよく洗落すのです。此外にはまだ苺汁を使ふ方などもありますがこれは赤い色がありますから餘り心持は良い物ではありません。夫れで植物酸は如何して皮膚を滑かにするかと云ふに、之は皮膚を柔げふけやさして枯死した上皮や不潔物を容易く洗落し得る樣にする爲であります。石鹼が皮膚に働く作用も略之に似ては居りますが、之は猶同時に皮膚の上の膏を乳化して取去る働きを持て居るのであります。

皮膚の皺は强ちお年を召した方に限りませぬ、隨分お若い方にもドーカ致すと之を見るのであります。其中でも額、目元、口元などに寄るものは容色の美を損する事誠に甚しいものであります。皺の出來る譯は第一には皮膚の下の組織特に脂肪組織が萎縮しますと夫を包んで居る皮膚も勢ひ夫と共にたるみが出て緩んだ丈は皺とならねばならぬ譯です、之を豫防するには矢張全身の榮養に注意して筋肉の發達を良し脂肪の沈著を豐にするより外はありません、第二には脂肪の組織は十分にあつても之を包む皮膚の方で其彈力性を失ひ伸縮する力をなくして緩む場合です、之は重に顏面に就て申せば第一には表情の過度、餘り嚴しく冷したり溫めたりする事、餘り頻繁に白粉其他の顏料を施す事、此等が原因となつて起る現象であります。

美顔術で皺を去るには色々な方法もありますが、其内廣く行はるゝのは摩擦法であります。先づ微温の硼酸水溶液中に漬けて絞たタオールか海綿で取代へ引代へ約十五分間許り顔を蒸て、皮膚が綺麗になつて毛穴が充分開たと思ふ頃、自然の脂に代るべき所謂マッサージクリームを皮膚一面に塗り指頭で徐々に柔かく擦り込むのであります。皮膚は油を吸上げる性質がありますから皮膚は油を含ませられて肥張し同時に皺目は消て滑かとなるのであります。斯う云ふ風に一週に一回位行へは宜しいのです、而して其間にはクリームを擦込ずとも單に皮膚をマッサージすることを毎夜牀に就く前に行ふのも利目がある。マッサージの仕方にも假之ば額の横皺なれば右より左、左より右へと摩擦し同時に縦に上から下へと撫で下し、目尻の皺などは人さし指と中指とを擴げて其指頭を圓く囘し乍ら揉むのです、皺の位置と性質とに從て夫々固有な揉方があります。又如何なる揉方にせよ極めてしなやかに揉んで、決して皮膚を餘り強く刺戟する様な事は仕ないのです。皺を去るには美顔術の方では猶此外に一日一回宛皮膚のマッサージを行ふた後、夜分に成つて皺の戻らぬ様に膏薬紙を張り附ける法や、又隔日毎にベンジイン入りの湯で皮膚を丁寧に洗ひ其間の日にはコールトクリームの玉で皮膚を敲く法などもあります。其他近來また盛んに電氣ローラアを用ゆる向きもあります、電氣は極めて微弱な電流を用ひ、ローラアも至極輕く撫で回るのです、又皺の上は横に轉しても決して皺目のなかや縦に轉しては良くありません。又最も簡單なのは一面にシャボン膏を塗り次に之を數回硼酸水ベンゾイン水で丁寧に洗去るのです。而して以上記載した各種の方法は何れも牀に就く前に行ふ方が最も效驗があると云ふ事です。睡眠中は顔面の皮膚筋肉も休養して居る時機ですから此時に與へられた榮養劑は最もよく吸收せられるのであります。

皮膚の脂腺から分泌する脂は皮膚の光澤と潤滑を助

ける點に於て極めて必要なものであります。之が少いと肌質が絶えずカサ〱して地が荒らされ又之が餘り甚しく出ますと皮膚がテカ〱と卑しい光澤を放ち且つ始終濕り氣を帶びて誠に心持の惡い物です脂腺の分泌が乏しい物に對しては全身の榮養を佳くすると同時に一方ではリスリン劑、クリーム等を用ひて皮膚に絶ず潤ひを與へねばなりませぬ。之に反して俗に油手油足など申しまして脂の分泌の多すぎる物にはサルチール酸粉末又は亞鉛花を撒布し又ザルチール酸軟膏をも用ひますが其後でチアヒロン膏を塗るのであります。併し猶利かぬ時には毎日一回四乃至五%のクローム酸溶液を塗ればよろしい。

腋臭は腋の下の皮膚の汗や脂の分泌が盛んで且つ其泌み出た物が化學的分解を起して色々のいやな嗅ある物となるのです、ですから其嗅を消すにはツマリ度々洗ふて分解を起さぬ樣にすればよろしい。或は醋酸を加へた水や、二分の一%の石炭酸、四分の一%のチモール酒精液などで洗ふ人もありますが一番簡單で確實なのは極薄い昇汞液を塗て置くのです、これは一週間位は持ます。一層根本的に治療するには外科的に腋下の皮膚の一部を腺と共に切取る外はありません。

頭髮や眉毛は何程濃くても差閊へはありませんが皮膚一面に生える所謂むく毛は成るべく目立たぬ方がよいのです、それには黑い色よりも淡い色が貴ばれる位であります。特にいくら美しい皮膚でも毛髮過多發生症とて餘り毛深過ぎるのも見苦しいものです此は遺傳的にも來ますが又強い藥を塗つたり繃帶を餘り久しく捲て居る等總て外來の刺戟に因て起る事があり又は神經の疾患のある處に密生する樣なこともあります。此贅毛を取除くにはベッチエル氏の脱毛クリームを塗ります、此中には硫水化石灰が含まれて居ますから、之を前以て毛を剃て置いた局處に厚く塗布し十五分も經てからその後を充分摩擦するのです、但し此際皮膚の爛れぬ樣に注意をしなければなりません。併し之よりも效果の確なのは矢張電

氣療法によりて毛髮の過剩の發生を制限するのであります、之は確に利目があります。

最後ににきびや樣々の色素斑に就て一言しますが、皮膚の表面には前に述べた通りに脂腺の口があいて居て其所から絶えず脂を分泌して居るのです、然るに皮膚の淸潔の充分行屆かぬため偶〻其口が垢や何かの爲に塞がれる時には内の脂は外に出る事は出來ず其處に溜つてにきびとなるのです。ですから之は平生皮膚を淸潔にしてさへ居れば決して出來ぬ譯です。之に最も利くのは次に記載するクムメルフエルト氏の洗滌液であります。

沈降硫黄	二・〇
カンフル	一・〇
アラビアゴム	六・〇
薔薇水	一〇〇・〇
石灰水	一〇〇・〇

皮膚に生ずる色素斑は日光に燬けて出來る物、妊娠の時に出來る物、初生兒は臀部に見る物其他はくろそばかす、又は樣々の疾病に伴ふて現はれる物など其種類も頗る多くありますが此等の成立に就てはまだ充分に分らぬものが多い樣です。中にもそばかすは好んで顏面に現はれ殊に其數も多くは餘り少からぬ物ですから之が皮膚の美を損する事も亦最も甚しい物です。之が治療としては一〇〇分の酒精に一分の昇汞を溶かした物を綿花に浸して局部に塗り、水疱が出來たら亞鉛華澱粉を撒布して置くのです、又次の處方も效果があります。

炭酸加里	一・〇
硼砂	一・〇
香水	八〇・〇
リスリン	二〇・〇

總ての色素斑も榮養狀態と密接なる關係がありますから局處の手當を施すと同時に全身の榮養を佳良にする事は勿論非常に大切なる事であります。

活ける家（續き）

醫學士　渡邊房吉君

（十五）活ける家の第二音樂室

鏡の樣な水面へ小さな石を投げ入れると、其の處を中心として輪の樣な波を描き、層々相踵いで終に岸邊に迄達する。音響も亦た空氣の波によつて生ずるもので、此波も同じく四方に分散する。道深い森の中で一と葉が木から落ちた時でも、必ず空氣に波が起つて、聞く人のある無しに拘らず、必ず多少の音の發るものである。空氣の波動が卽ち物の音響で、換言れば

空氣は微妙な音樂者

であつて、聲帶を彈で丶諸種多樣な音を出し、更に其音を擔ふて之を他の樂器に傳へる。他の樂器とはコルチー氏の機關と云つて。我々の耳の中に在り、そこから腦に傳はつて活ける家の主人から聞き取られる所である。故に我が活ける家の第二音樂室は耳であつて左右各々一つ宛ある。耳には三つの部分を區別する、外耳と、中耳と、內耳とである。

外耳

外耳とは外に見へてゐる所で、其大小形狀は人々によりて違ふ。世界は廣く古今は遠く、其間に生れて來た若しくは現に活きてゐる人々は實に少くないのであるが、耳の同じと云ふものは一人も無い。十人は十色で、耳を見れば其人がわかると云つても良い位である。外耳は顏面の美を添へるものであるが、其重な役目は空氣の波を捕へて之を中耳の方へ送り込むものである。故に其邊緣は漏斗の樣に擴がり、內面には幾多の皺襞があつて、空氣を導き入れる通路となつてゐる。此通路を傳うて入れば細い長い彎曲したトンネルとなる、之を

外聽道

と云ひ、其周壁には細い毛が樹へ付けてあつて、空氣と共に入り込む塵埃や砂土を濾し去る樣になつて

居る。尚ほ入り口の近傍には小さい幾多の腺があつて、苦い蠟様の液汁を分泌し、昆蟲などの耳の中へ入るのを防ぎ、兼ねて外聽道を濕ほす樣にする。耳の形の各人によつて異うのは前に述べた通りであるが

各動物によりても亦耳の形が違う

圓み掛つて居るのもあり、先端の尖つて居るのもある。鳥類には外耳が無い、蛙も耳を持つて居らぬ。蛇が音樂を好むとは昔話しに聞く所であるが、「アッダー」と云ふ毒蛇の一種には耳の發達が惡るく、西洋の語り草にも「彼の人はアッダーの樣に聾だ」と云ふ事がある。

多くの動物は外耳を自在に動かして、音響のする方へ向ける事が出來る

森の中の兎は遠方から獵師の足音をきゝわける、南亞米利加の曠茫たる原野を野馬の一群が旅行する時には、敵の近か寄るのを警戒するため、前後左右に哨兵を付けると云ふことである。卽ち一群の先ッ先きに立つ一匹の野馬は常に外耳を前方へ向け、殿に立つ一匹の野馬は後方へ向け、兩翼に備へて居る二匹の野馬は右と左へ向けてゐると。蓋し外耳には三個の小さな筋肉が付いてゐて、其筋肉の作用で或は外耳を上へ上げ、或は之を後ろへ引き或は之を前へ出す。動物では此筋肉の發育が良いから自在に外耳を動かすことが出來る、が、人類では其發育が惡いから之を動かす事が出來ぬ。然かし多くの人の中には之を動かし得る者もあり、或は之を練習すれば漸次動かし得る樣になるものである。

外聽道は行き詰りの道で、其突き當りには薄い膜が大鼓の皮の樣に張り詰めてある。大鼓を打てば鳴る樣に、空氣の波が此膜へ打ち寄せて來れば振動して其音を內方へ傳へる。故に此膜を

鼓膜

と云ふ。鼓膜には纖細な筋肉が附いてゐて、ピッチの高い音が觸はれば此筋肉が收縮して鼓膜を張らせ

ピッチの低い音が來れば此筋肉が長く伸びて鼓膜の張りを弱める。此筋肉の装置によつて其緊張の度がかわり、かくて千種萬様なる音が傳はる。鼓膜迄が外耳の領分で、夫れから先きが

中　耳

である。卽ち中耳と外耳とは鼓膜によつて全く堺ひされてゐる。中耳の中には三個の小さな骨がある、一つは槌の形、一つは鐵砧の形、他は鐙の形であつて、槌骨は鼓膜につき、鐙骨は内耳に連る小さな孔へはまり、以上二つの骨の間へ鐵砧骨が連つてゐる空氣の波で鼓膜が振動すれば、其振動が槌骨に傳はり、鐵砧骨を經て更に鐙骨に至り、鐙骨から内耳へ傳はる順序である。

中耳は四面共に閉鎖されて居るのでなく、細い暗い道によつて咽喉と續いてゐる。此道を

オイスタヒー氏の管

と云ひ、此管によつて空氣が互に往復する。鼻の孔と口とを塞いで強く鼻へ息を入るれば、咽喉の空氣が中耳へ入り、鼓膜が外方へ壓される樣になる。物を嚥下む樣にすれば今度は反對に中耳の空氣が咽喉へ來て、鼓膜は元の位地へ歸る。此の如くして鼓膜の内外の空氣は、互に其壓力の等しいわけであるが咽喉加答兒などでオイスタヒー氏管の出口が腫れ塞がれば、空氣の出入が惡くなり、鼓膜が内方へ引込んで耳の遠くなることが多い。其時には管で鼻から空氣を入れる。

中耳の病氣は恐ろしい鼓膜が破れて膿が外へ出て仕舞へば、俗に所謂「みみだれ」と云ふので、聽力の弱くなる位ですむが、不幸にして頭の中へ病氣が進めば遂に死を免れない彼の有名な外山正一氏の如きも此ために逝くなられたのである。

内　耳

は深く骨の中へ埋つてゐる複雜を極めた構造で、到底筆紙に分り易い樣に書き表はすことは出來ぬ、只これだけの事を述べて置かう、曰く、鐙骨から内耳

の中の液體に振動が傳はり、遂にコルチー氏の機關に觸れ、此機關から腦へ音響を報導するものであると

内耳の妙しき構造により色々の音響を區別する事が出來る、カナリアの聲は鶯と違ふ、蠅の羽音は蚊の夫れと異る、小川の私語は夏の日の雷鳴と同じでない。人の聲に於ても高いと低いと、速いと遲いと種々樣々である。河海の鳴動、風雪の哮び、獸聲、悲鳴、琴、三味線、誰か之を一つ音ときこう

空氣の波が長くて遲ければ、之に由て生ずる音は低い。我々の耳は一秒間に十六波動より以下の波動で生ずる音は聞きとれず、又一秒間に五萬以上の波動をする音も聞き取る事が出來ぬのである。故に我々人類の聞き得る音と云ふのは、一秒間に十六以上五萬以下の振動をする空氣の波で、夫れより以上及び夫れより以下の音は、幸か不幸か我々の鼓膜には響かぬのである。換言すれば世の中には我々の聞く事の出來ぬ。の存在する譯である。

無聲の聲、無音の音

音に就て尙ほ一つの不思議がある。即ち二つの音叉を取つて互に之を隔てゝ置き、やがて一つて音叉を鳴らせば他の音叉も之に連れて自然に鳴り出すことのあると云ふ事實である。昔し支那の函谷關と云ふ關所は、夜明けの鷄の鳴かぬうちは開けられぬと云ふ規則であつたが、或深夜に此處を通り拔け樣とする人があつて、ドーしても開けて貰わうとして鷄の鳴く眞似をした、然るに此鳴き聲に釣り出されて處々方々の鷄も鳴き始めたので、門をあけられたと云ふ話しがある。甲が笑へば乙も笑はなければゐられなくなる、一人が泣けば他の人も涙を催す。これが同情同感の理で、音に於ける此現象を

音の共鳴

と云ふのである。耳は音の入り口であるから、此入り口を通つて種々雜多の音が入り込む。佞言やお世

辭や惡る口や密語や、價値の無い無駄言や、聞くも汚らはしき淫聲や、是等は皆耳へ入つて人を賊する者である。然し千鳥の囀や、谷間の水のさゝやきや、木々の梢の歌などの樣な自然の聲は人の心を純潔にさせる。貴き眞理や、愛の言葉や、氣高き歌や勇敢なる音樂は人の品性を高尙にし、人の元氣を興進させる。大洋の波は水を潔め、陸の風は空氣を潔める、人も高潔壯快なる言語によつて社會人心を潔めねばならぬ。

耳の普通養生

としては成る可く耳の中に觸らぬが良い。理髮店で耳の毛を剃るのも惡い、耳垢を取り出すために耳搔きや楊枝の尖端などを入れるのも良くない、是等の垢は下顎の運動と耳の中の毛のために自然に出ることが多い。西洋の或滑稽家は云つた「肱より太い物は耳の中へ入れてはならぬ」と。若しも蠅や蟲類が入つた時にはグリセリンを少し暖めて注し込む、冷い液體は決して耳へ入れてはならぬ。河水或は海水で游泳しやうと思ふには、必ず綿の栓をして游泳を終つたらば直ぐに取り去る。

風邪をひいて鼻の具合の良くない時に、決して強く鼻をかむな。オイスタヒー氏管を傳つて、病氣が中耳まで蔓延ると云ふ危險がある。

強い風に當るな、雪や雨で耳を濕らさぬやうにしろ、誤つても耳を打つな、耳を打たれて鼓膜を破つたものは少くない。

卒中の話（續き）

醫學士　Z、H、君

七、**一定の中毒**　中毒の筆頭は云ふまでもなく實に酒精である。酒精は酒精其儘に用ひらるゝこと殆どなく、酒として世界各國何れの處にも蔓延し、酒稅が幾十倍幾百倍となろうが、又法律を以て禁酒令を發布しようが、到底禁じ難いのは煙草と同じく酒であつて、人間が此等の嗜好品を全然忘れ去ることの

出來ないのは、殆ど本能性と見做してよい。身體全般に亙る酒の害は暫く置くとし。酒飲みと名づけらるゝ者が、卒中にて倒るゝことが多いのは何人も疑はぬ所であつて、酒飲み自身も內々警戒し、卒中を恐れて折々は斷然禁酒しようかとも思ふこともあるが、其所が人情の弱點で、惡いと知りつゝ飲み續け遂に取返しの付かぬ慘憺たる狀態に陷るのである。然し、酒と云つても酒の種類にもよるので、燒酎、泡盛、乃至「ブランデー」の類は、普通日本酒に比し數倍の酒精を有し、其害も頗る甚しい。之れに反し、普通日本酒のいゝのを晚酌一二合を傾ける程度の者は、まだ酒飲みの仲間入りは出來ぬので、從て思ふ程の害も先づ無いと云つてよい。偖、酒が如何にして卒中の原因をなすか。現今の說明は甚だ簡單で、一は血管を破壞し易く變化し。二には大量の飲酒の結果、體內水分の過剩を來し、心臟竝に血管の負擔を大ならしむるにありとせられて居る。尤も、一時に多量の液體（酒のみに限らず）の攝取は、卒中の直接誘因ともなり得るは勿論である。彼の勞働者が往々屍を路上に晒すのも、蕩兒が恥を妓樓に殘すのも、多くは此原因に依るのである。故に、先に述べた遺傳を持ち、尙卒中質の體質の者であるならば、其危險の一層甚しきは再言する迄もなく。假令全く遺傳なく、卒中質ならざる者も、自ら之が爲めに素因を作り得るものであるから、此點に向ては大に注意を拂ふべきである。

次に心臟竝に血管を害する慢性の腎臟炎（殊に老人に多き萎縮腎と稱するもの）あるものは同じく危險である。其他強い煙草や、痛風、僂麻質斯を長く患ふた者も警戒を要する。

●●鉛中毒　慢性の鉛中毒は酒精に次で卒中の原因として注目せらるゝもので、職業上鉛、又は鉛の器物を取扱ふ活版職工畫家などに來り、鉛管の水道を長く用ゆる人にも見るもので、殊に我國にては俳優藝娼妓の常に鉛分を含む白粉を用ゆる者に多い。中毒の有樣は、重なるものは、物の味が變りて金を嘗

める様な味がし、齒齦が青灰色に變色し、又往々鉛中毒疝痛と云つて强度の腹痛を起し、或は處々の關節や、筋肉が痛み、或は神經の痲痺から手足が不自由となり、其他耳が遠く、物の嚥下が困難となり、或は言葉や精神などの障碍を起すことがある。一般に中毒者の顏色が蒼白となるものである。鉛の慢性中毒は以上の外、血管に害をなし割合に早く若い者に動脈の硬化と云ふものを起し、血管を丁度年寄りの血管の様に固くする其れが爲め卒中を起すことゝなるのである。

尙重要なるものは黴毒であるが、初期に於て陰部の「シコリ」、頭髮の脱落、及び皮膚の發疹位なら、只人に對して恥しい位で濟むものゝ、後期になると、此黴毒程厄介至極の者はない。出物腫物所嫌はずとは善く言つたもので、身體の表面に腫物の出來ることなどは何でもない。目に見えない内部の諸臟器は殆ど區別なく黴毒の襲擊する處となるに至つては、若し之に向ての特效藥がないとすれば、其恐しさは癌や結核の及ぶ處であるまいと思はれる程である。殊に腦殊に腦血管は黴毒の侵害を蒙ること多く、前にも言つた如く、若年にして卒中に襲はれる者は此黴毒を先以て考へねばならぬ。

其他心臟病や血管を侵す總ての物は何れも卒中の原因となり又直接其誘因となり得るのである。

以上は卒中の遠因或は眞の原因なるものを述べたが近因即ち直接の誘因と云ふべきは、烈しい運動、大聲にて談話すること、烈しき笑、忿怒、悲みの様な精神の感動、又は興奮、暴飮、暴食、熱き湯に入るなどで。何れも腦に忽然多量の血液を送るのが、破壞し易き血管を破壞する原因となるのである。尤も其身體の運動、精神興奮等は必ずしも甚しきを要しない。普通の動搖や、感動が、時には出血の誘因たり得ることは、車上に卒倒して車夫を驚かし、談話中突然轉倒して相手を狼狽させることがあるのを見ても分かる。又心臟病などあつて、急に腦の血管が閉塞される爲めに起るのも、誘因や、起る時の狀態

は略之と同一である。

卒中の起る有様　卒中の起るや、殆ど其名の如く突然である。他の疾病殊に傳染病には、病氣の本現象が表はるゝ迄、少くも多くは三日乃至十二日位の潜伏期なるものがあつて、其間は病原菌が身體に侵入し、其毒勢を逞しふするに要する時間である。例へば、腸窒扶斯は腸窒扶斯菌を嚥み込むでから、九日乃至十一日、長ければ二三週日の潜伏期があつて。其間病人は、全身に違和を覺え、身體がだるく、腰痛、手足又は頭の痛あり、食物は進まず、大便もきまりがなくなる。癲癇などでも、起る前には耳鳴り、目くらみ、何こなく不快の感がある。之は前觸し(前驅症)であるが。卒中には此前觸しがなく突然襲撃する。然し、時には前逹て耳鳴、頭痛などあり氣が少々變となり、又は餘程前から思考散亂、物忘れ、頭痛、嗜眠等のあることもある。

次に卒倒する場合は所謂誘因たるものが必要であるが、中には殆ど其誘因を見出すこと困難な場合がある。即ち或患者は平常の如く仕事をして居る際中急に一側の手がしびれたと云ひ。或人は食事中突起箸を落し、それから一側の手足が不自由となつたと云ひ。又は便所に行く途中倒れたとか、親戚に見舞に行つて其返り途に小石に躓いて倒れて、半身不隨となり。夜中に目を醒した時に、右の手がしびれたから、これは變だと思つて起きようとしたが、右の足がきかない、驚いて他の者を呼び起こさうとしたが言葉がよく出なかつたと云ふ様な極めて簡單な起り方である。

然し、定型的模範的の卒中は所謂卒中發作によつて始まるもので、患者は俄然轉倒し、失神狀態に陥り手足を全く動かさず(時には手足の痙攣を起す事もある)、恰かも熟睡した有様である。尤も、此時嘔吐などをなす者もある。患者の顔は多くは潮紅し、或は稍青藍紫色を帶び、時には蒼白く、呼吸深く、鼾聲を發し、嚥下は困難、往々大小便をもらす。此の發作と名づけらるゝものは、多くは數分間或は一日

以上も繼續することもある。發作の始まりや、其輕重の度は、常に一定でなく、腦出血（又は腦血管の閉塞）の場所と、出血量の多少に關係する。

卒中の發作後に直に死亡する者は餘り多くない、死するのは多く半日乃至二日の間にある。尤も發作は一回に限らず、二回三回反覆することがあるが、此場合は患者の生命は甚だ危險である。但し、生命危險の度は必ずしも發作の輕重に關するものでなく、發作の重かりし際出血の却て少なき事もある。又卒中自己の外、合併症として肺炎などを起し、それが爲め死する事があるから油斷はならない。

◎卒中發作後の狀態◎◎◎◎◎　患者が幸にして死を免るときは、二時乃至六時間にして徐々に昏睡狀態から半眠狀となるで、之が意識が恢復する徵である。患者は眼を開き、目醒めた者の樣に體を動かそうとするが一側の手足又往々同側の顏半面が動かず、又言葉も明瞭を缺き、痲痺した半側が物が觸れても分らぬ事もある。卽ち此狀態は吾々が日常見る半身不隨と稱するものである。半身不隨は右半身と左半身との區別があるが、此區別の生ずる理由は稍專門に亙る恐れあるけれども。一言で云へば、右半身の中心は腦の左半部にあつて、左半身の中心は之に反して腦の右半部にあるから、若し左の大腦に出血があれば右の半身不隨を來し、右の大腦に出血があれば、左の半身不隨を起すのである。左右の半身不隨が、どちらが多いかと云へば、右が多い。之れ左の大腦に變化を起すことが多いからである。一時に左右兩側の不隨を起す事は稀で、若し左右にあるものがあれば、先に右或は左の半身不隨を起し、時經て反對側を半身不隨を起したものである。又兩側の時は他の病かも知れない。

◎半身不隨は恢復し得るか◎◎◎◎◎　卒中發作後。若し出血から起つたものならば、腦の實質を荒した血液が追々吸收されるに從て、始め全く動かざりし手足は、漸々動く樣になり、言葉も殆ど普通となる者もある之は尤も幸福の方で、大抵二三ヶ月乃至四五ヶ月は

かゝる。然し、卒中發作後四五ケ月以上も立つて全く元の儘で居るか、少々は恢復しても其れ以上癒らぬものは、先づ恢復の見込なく、終生憐れなる不具者と見做してよい。然し、同じ不具でも、覺束ながら歩行も出來、一通りの用事に差支ない位の者と、身體がまるで褥に結び付けられた様に、人手を假らずには身動きも困難な者のあるのは皆人の知る所である。就中、最も氣の毒なのは精神に變化を來す者で、或は子供の様に些細の事に泣き、怒り、或は喜び、又は二三日前の出來事を忘れる癖に、我儘となり、癇癪持となるものである。

卒中の手當　何事によらず轉ばぬ先の用心で、起らぬ前に用心し、豫防するのは最上の策である。**卒中の豫防**　卒中の腦血管の閉塞から起るものは、心臓病などによるものであるから、先づ此方の手當をし二重に病氣にならぬ用心をする。然らずして腦出血によるものは、先に原因の條に述べたあらゆる害を蒙らぬ様にするのであるか、原因となり得るものゝ數が甚だ多いから、實際此豫防なるものは誠に容易でない。彼の傳染病の如きは、定まつた一病原菌の侵入を防ぐ工夫が完全に行はれさへすれば、身體は其に對して毫も恐るゝ所はないが、卒中には種々の原因中、豫防上殆ど不可能な遺傳が有る者の一として數へらるゝ以上、豫防も甚だ心細い者である。然し、自己は已に遺傳を享有するものとしても、遺傳のみが卒中の唯一原因でないから、他の原因を豫防することが出來れば、必ず卒中に罹るとは限らない又生活中他の原因殊に黴毒の侵襲を防ぎ、生活方法を適度にして脂肪肥滿等に陷らぬ様に注意するのは卒中に對する自衛の道であるのみならず、子孫に向て遺傳を減少し、又は消滅せしむるので、子孫に對する最大義務のみならず又最大の恩惠と云はねばならぬ。又偏するの嫌はあるが、子孫の保護上、縁組に際して精神病、結核、癩等の如く、必ず卒中の血縁なるものをも念頭に置く必要があろう。

次に終始心懸くべきは直接誘因となるを務めて避く

ることである。前にも一寸述べた如く、例へば心臟病に罹つたものなどは、一旦心臟の或部分に破損の出來た以上、終生如何なる方法名藥と雖も元の様にすることが不可能であるが、そこには天然の靈妙作用があつて歪んだなりにも心臟を殆ど普通の程度迄に動かせる。故に其人が其心持ちで攝生を守るならば、天壽を全ふすること强がち不可能でない。之と同じく、卒中質、或は今にも破壞しそふな極めて薄弱な腦血管を持つて居る人でも、小心翼々誘因となり得る諸害に遠かる勇氣があるなら、卒中は左程に恐るゝに足らない。

●●●●●●●●●●

卒中發作の起りし時の處置　其處置は醫師の範圍であるが、醫師の來る迄は家人に時と場合によつては相當の手當は必要であるのみならず、時には其手當如何は生命に關する程の重大な事である。手當には先づ卒倒者が何の爲めに卒倒したか、即ち其原因を探究するの必要がある。單に卒倒なるものゝ原因には種々あるが、患者の是れ迄の狀態と、卒倒の模様により、大抵は見當が付く。卒倒者が四十歳以上で卒中質のものであつて、泥醉して居るとか、又は無理の仕事をしたとかであるなら、恐く卒中腦出血の爲めであらう。又神經質で、是れ迄度々人込や何かで倒れた事があり、顏色靑ざめて居るものは腦貧血が原因であろう。其他、單に腦充血でも倒れ、癲癇でも倒れる。又聊か專門に入るが腎臟病の尿毒症と云ふものでも、糖尿病の昏睡狀態、或は酒の急性中毒、莫比や阿片中毒などでも無中となる。然し此等は、其人の平常の狀態や、病を知つて居れば、想像する事は左程困難でない。

さて卒中と見込が付けば第一念頭に置くべきは患者を動かさぬことである、少くも患者の頭を動かして出血を大ならしめぬことである。出來得るなら其儘にして置くがいゝ。然し便所の傍、路上で倒れた者は、事情止むを得ないが、運搬には先の心懸が肝要である。次に患者の頸や、胸の邊をゆるくして呼吸を容易にし、無用の談話などは一切避け。顏が赤く

頸筋の搏動が烈しく見ゆる場合は、頭や項に氷嚢を置くのもいゝが、強く壓付けぬ樣にし、又冷水で冷してもいゝ。それから、多少看護の心得ある者なら浣腸に依て大便を排泄するは最も機宜に適した處置である。發作の經過せし後の手當、先にも述べた如く、治るものなら四五ケ月の間には追々恢復するものであるが、大多數は多少の不具を殘すを免れない此半身不隨は劫病と云はるゝ丈、之が看護の任に當る妻や嫁の身には、其悲しさ、つらさは如何許りであろうか。さらでだに、短氣となり、癇癖が強くなる上、言葉の滿足ならぬ爲め、病人の機嫌は益〻惡くなる一方なのに、三度の食事の世話、大小便の仕末に至る迄、一々妻や嫁の手を借りねばならぬのであるから、其骨折は一通りでない。其他精しき療法は醫者の領分であるから省くことゝする。

（終）

衛生生活の一日（續き）

東京醫科大學　A、B、君

第四十八　睡眠には如何なる姿勢をとるべきか

如何なる姿勢を以て牀中に横はるべきかと云ふ事で有りますが、之れは何でも無い樣な事では有るが、隨分長い時間の事では有り、且つ年中毎夜の事で有るから、其人の體格の上、健康の上に非常な影響を來す事と成ります、睡つてから後の事は自分では何事も知らぬのだから、如何に注意しても無意味で有ると思はるゝ方も有りませうが、決して左樣では有りません、毎日其積りで寢に就いた時に體格を正して居れば、自然に習慣と成つて、睡眠中も續け得るもので有ります。

第一に身體の方向で有りますが横臥か仰臥か伏臥かの三で、其中伏臥は誰も好んでせらるゝ方も無いでせうし、胸や腹の器官を直接に壓するので有ります

から、自分にも苦痛で有り、衛生上にも有害なる事は明白なる處で有ります。仰臥は如何かと云ふに、之れは衛生上は別段害は有りませんが人によつては仰臥は久しくは耐え得ない人が多く有ります、非常に健康な人や慣れた人で仰臥を快しとせらるゝ方には仰臥で結構で有ります、最後に横臥は最も多く行なはるゝ處で、之れは最も適當だらうと思はれますが、只注意すべき事は、横臥をするに左右時々變更すべき事で有ります、一方にのみすると云ふ事はよく有りません、肺臟や心臟の如き胸部の器官が此爲に壓迫せられたり、充分に廣がる事が出來なかつたりして、長い間には障碍を來す事と成ります、横臥にも只横に成つたばかりでは成らぬ四十五度位の角を成さねばならぬ等の說を成す人も有りますが、それ程面倒なことは云はずともよからうと思はれます。

第二には足で有りますが、足は十分に伸して寢る樣に習慣を附けねば成りません、夏向は其樣な事は無いが冬に成ると、足を屈して海老の樣に成つて寢る人が多く有りますが、之れは甚だよく有りません、殊に發育中の少年等は此爲に體格が惡く成ります、是非十分伸して寢ねば成りません、足が冷えて伸されぬ時も有りましやうが、多くは習慣のもので有りますから、牀に入つた時に少し勇氣を出して伸せばあとは何とも無いので有ります、若し強て足が冷えて寢られないとならば、ゆたんぽを入れるとか、毛布を以て裾の方をまくとか、寢衣を長くするとか、布團の裾の方を十分に蔽ふとか種々の方法が有ります。茲で一寸巨燵の事を申して置きませう、布團の中に巨燵を入れて寢ると云ふ事は絕對的廢止にしなければなりません、巨燵の有害な事は誰も知つて居る處で有りませうが、第一には巨燵を入れる爲に足を十分に伸す事が出來ないので無理な姿勢で寢るから、不愉快で夢多く熟睡をする事困難で有ると共に惡き姿勢の習慣がつきます、次に尙一層恐るべきは炭より來る中毒でありまして、炭團を用ゐても炭を

用ゐても、害は隨分多いので有ります。火鉢の中の炭火ですら惡い瓦斯を出して室内の空氣を汚すので有りますから、況して布團で蔽ふたせまい處の事だから空氣の多く入らぬ爲めに炭の燃燒は著しく妨げられる、隨て惡い瓦斯は常よりも多く盛に生ずる其瓦斯が布團に蔽はれて居るから外には出られない只僅に隙間が有るから競ふて其處から出て來る、そこに人間の鼻が有る口が有る惡い瓦斯は悉く吸ひ込んで仕舞ふ、之れ程危險な事は有りません、此爲めに頭痛がする眩暈がする頭が重く體がだるくて、朝に成つて起き出づる事の出來ぬ程に成る事すら有るので有ります。巨燵を入れると云ふ事は習慣で有りますから、辛抱すれば出來ぬ事は決して無いので有ります、寒くて困るならば敷布團を厚くするなり毛布にくるまるなり、如何にとも方法はつくので有ります。又病人や老人等にて足が冷えて仕方の無い時には前述の如く湯婆を入れる方が宜しい、湯婆ならば惡い瓦斯を出す患も無く、形も小さなものだから左のみ邪魔にも成らぬので有ります。又足が冷えるからと云ふので晝の足袋を其儘で寢る人も有りますが之れも甚だ宜しく有りません、皮膚に直接に著けるものゝ中でも足袋程よく汚れるものは有りません、歩く時には外からは埃がかゝり、内からは足の脂や汗が盛に出るから、足袋は洗つても〳〵直に汚なく成るもので有ります、それを其儘で寢に就くとは實に不潔不衞生極まると申さねば成りません。

第三には手で有りますが、之れは手を自由にして樂な所へ置いて寢ればよいので有りまして、此樣な事迄云ふ必要は無い樣では有りますが、併し手を自由にして置かない爲に病氣を起した樣な事も隨分聞かるゝので有ります。一々解剖上の難かしい事は申しませんが、腕には尺骨神經、橈骨神經、正中神經と云ふ三つの大きな神經が有りまして、此三つの中何れの神經を冒されても直ちに腕や指の運動にそれぞれの障碍を來すので有ります、而して寢時に手を體の下に敷いたり、無理な位置にして置いたりする爲

めに斯かる障碍を來した例は往々にして有ります、朝起きた時に暫時、手と指との半分が痺れて居て動かなかつた樣な事は誰方も經驗が有りませうが、之れが烈しい時には一週間も二週間も手が利かぬ樣な事が往々起るので有ります。殊に肘を枕にして寢る樣な事は宜しく有りません。次に叉手を胸の上に置いて仰臥する事も宜しく有りません、胸に手を置いて寢れば魘されるとか夢を見て困るとか云ひますがそれは其道理で有りまして、胸の上に手を置くが爲に內臟を壓する、息が苦しい、不愉快に成る、寢苦しい、其爲に夢も多く成るので有ります。

第四には口で有りますが、口を開いて寢ると云ふ事は甚だ危險で有ります、何故かと云ふに、大體呼吸は鼻でする事と定まつて居るので、口から呼吸するのは例外で有つて衞生上宜しく無いので有ります、鼻からの道には呼吸に必要な裝置はちやんと備はつて居る、中へ通して惡いものが來れば鼻の中の澤山の毛が之れを妨げて通さない、毛の間をくゞつて入る樣な小さなものはすかさず粘膜で吸ひ取り、粘膜の表皮細胞は極めて微妙なる裝置が有つて、肉眼には見えぬが極く小さな纖毛が附いて居つて其毛が絕えず內から外の方へと列を成して運動して居る、其表面は有害物や黴菌等が來れば、纖毛の働きで追々と外の方に送り出して仕舞ふ、だから肺臟の方には有害なものは入る事甚だ少ないのであります。然るに口の方には斯かる裝置が全く無く、口を開いて居れば何の妨げも無いから如何樣な物でも平氣で入つて行く、どれ程有害物が入つても之れを遮り止める物が無いので有りますから、其儘ずつと肺臟の方へ通つて行き、種々の疾病の源と成るので有ります。其他又寒い時等には外界の空氣は甚だ寒冷で有るから之れが直に咽喉や氣管に通り行く事は危險で有ると云ふので、鼻ではちやんと之れを溫める裝置が有る、鼻から入つた空氣は直に奧へ通るのでは無く、一旦上部の方へ上つて十分溫められた上で奧の方へ行くので有ります。然るに口には其樣な事は全く無

いから外から入つて來た空氣は直に咽喉に行くので其寒氣の爲の刺戟で咽喉粘膜に加多兒を起す。隨て黴菌が附き易いと云ふ樣な譯で、事は追々重大に成つて來るので有ります。此樣な次第で有るから口を開いて寢る事は如何に危險で有るかは明らかな事で有ります、空氣中には何處にも無數の黴菌が居るので有りますから、常に之れに對する防禦をして置かねば成りません、其樣な小さな物ばかりで無く時には又、口を開いて仰臥する時等には大きな物も入らぬとは云へませぬ、それが別段毒には成らぬにしても、天井から落ちて來た汚物や、ぞろ〳〵匍つて來た蟲等が口へ入るのはあまりいゝ心地のものぢや有りません。今一つ口を開いて寢る事の害は鼾で有ります。鼾は其本人には何にも差支は有りますまいが近くに寢て居る者には實に迷惑千萬で有ります、而して此鼾は口を開いて寢る人に甚しいので有りまして、口を閉ぢて寢る樣に癖を附ければ自然と鼾も止まるわけで有ります。玆に序に申して置き度い事は、頭から布團を引被いで寢る事で有りますが、之れの惡い事は申す迄も有りません。布團に蔽はれて居て狹い所で呼吸するから空氣は直に吐出したる炭酸瓦斯で汚れる、其汚れた中で呼吸して居るので有るから大變息苦しいので有ります。どの樣な寒い時にでも首から上は外へ出して寢る樣にせねば成りません。

第五には顏貌で有ります、之れは衞生上には直接關係は有りませんが美貌術の上に必要な事ださうですから一言申添へて置きませう。凡て人の顏貌は其人の精神狀態に由つて變ずる事は勿論で有りまして喜怒哀樂愛惡慾の七情は皆其眉宇の間に現はるゝもので有ります。斯の如く其情に由つて其時々に顏貌が變ずるばかりで無く、又或る情を度々現はして居れば何時と無く其人の顏貌が常に其情を現はし來る樣に成ります。度々强慾な事をするお婆さんの面が自然と强慾な面附と成り、孤兒の面が何時と無く寂しい相と成り、愛心深き人の面が何時と無く圓滿と

成ると云ふ風に、自然と其人の特有の相が備はり來るもので有ります。之れは何故かと申しますに、大體人の顏面が種々の表情を成すのはつまり一々皆顏面の筋肉の作用で有りまして、喜を表はす時と悲を表はす時とは、諸筋の作用が全く別樣で有りますが、其内のある作用を度々やつて居れば其筋が殊に強く發達し來りまして、終には常に其表情が顏面に殘る樣にも成るので有ります。偖て斯かる次第であるから、常に微笑を帶びたる美しき顏貌を持ち度いと云ふには、成るべく多く其樣な面をして居なければ成らぬと云ふ事になる、併し晝間は種々の雜務に追はれて居るからさう面の事ばかりも氣にして居る譯には行かぬ、そこで賢い方法として就寢前に微笑を帶びた美しい表情を持つて寢る、さすれば睡眠中長く此狀態を持つ事が出來るから、追々と美しき顏貌と成る爲めに甚だ有效であると云ふ說なので有りますが、之れは只私は受賣をするばかりで有りますから確に美人に成るとの御請合は出來ませぬが、一理ある事だとは思はれます。而して微笑を帶びて寢よと云つたからとて、胸に不安が有つたり怒つて居たりして强て微笑を帶びる譯には行かぬので有りますからつまる處は私が就寢前の注意に述べました樣に凡ての事に安心して寢ると云ふ事に外ならぬので有ります。

第四十九　不眠の時は如何にすべきか

何の病氣でも何れか苦しく無いと云ふものは有りませぬけれど、他人には病氣の樣には見えずして自分一人で苦しまねばならぬ病程つらいものは有りませぬ。不眠の如きも其一つで有りまして、夜深更、世は已に靜まつて、人は皆微かなる鼻息を爲して熟睡して居るのに、自分一人は如何しても寢る事が出來ぬ、越し方行末の事さま〲に考ふれば考ふる程神經は過敏に成つて寢つかれない、之れでは成らぬ明日の日課に差支へるから早く寢たいものだとあせればあせる程感情が高まり興奮して寢られない、彼方

へ寢返り此方へ寢返り轉々煩悶實に苦しいもので有ります。偖て斯の如く苦しいもので有りまして又一度此不眠症に罹つて、之れが續いて癖と成る樣に成ると實に頑固なもので有りまして、仲々俄には治癒しないもので有ります、昨夜は寢られなかつたから今晩は是非熟睡せねば成らぬと思つて牀に就く、寢られゝば宜いが〳〵と思つて居るから感情が高まつて又寢られ無い、斯く不眠が續く爲めに睡眠不足で晝間は非常に睡むい、耐えられ無く成つてついうたた寢をする、夜は又寢られ無い、實に苦痛で有ります。斯かる次第で有るから、少しでも不眠の徵候が見えたら早速其原因を考へて之れを去る樣に勉め、不眠を癖と成らぬ樣にせねば成りません。故に玆に先づ

不眠の原因　を述べて見ませう。勿論種々の重い疾病や精神症狀等にて不眠の來る事は澤山有りますが、斯かる時には只其病氣の一の徵候として來るもので有つて、ちやんと醫師が附いて居る時の事でありますから、此方の事は申しません、只日常他には何等の障碍も無くして來る不眠の事を記しませう。普通不眠の原因と成るものは精神の過勞で有ります殊に夜間に成つて牀に入る時迄は尙思ひ惱んで居る樣な時には不眠を起し易い。又就寢前に甚しく感情を興奮せしむる事も宜しく有りません、しみ〴〵と悲しい物語りをしたり、小說稗史を讀み耽つたりする樣な事で有ります。又夜間に多量の湯水を飮む事も宜しく有りません、俗に腹ががぶ〴〵云つて寢られないと申しますが事實で有ります。就寢前に食物を攝取する事も原因と成ります、殊に甘い物、飾菓子の類は宜しく有りません。又刺戟興奮し易きものを取る事も原因と成ります、茶、珈琲其他澤山有ります。身體を不潔にし又は不潔なる寢衣を用ゆる事も一の原因と成ります。其他小さき原因と成る條件は澤山有りませう、勿論之等の原因にて誰も彼も皆同じく不眠を來す譯では有りませぬが、多少身體の弱い人とか、感じ易い人とか、所謂神經衰弱の傾

向のある人等には僅の原因も甚しく作用するので有ります。又斯かる傾向の無い人にしても、種々の原因が重なる時には、直接不眠を來さぬにしても目が覺め易いとか、熟睡せぬとか、夢を多く見ると云ふ様な事は起るので有ります。斯かる次第故少しでも寢難い様な徴候が現はれた時には

ヽヽヽ不眠の豫防としては、つまり今申した原因を取り去る事で有ります、即ち精神を勞する事を少くし、就寢前少くも三十分位以前には精神的の仕事を棄て、書物からも遠かり、全く氣を換へて暫時快談でもして牀に就く。湯水や、茶や、間食も廢し、寢衣や布團等は清潔なるを用ひ、身體も清潔にする、殊に足が汚れて居たり、背に汗があつたりしては不愉快で有る、成べくは寢前に一度冷水を以て全身を拭ひ或は摩擦すれば甚だ愉快で有る。其他又神經衰弱が原因と成つて居る事が多いから、一般に神經衰弱の方の療法をもせねば成らぬ、朝の冷水摩擦だの、生活を規則正しくする事だのは決して忘るべからざる事で有ります。

ヽヽヽ不眠の療法として最も簡單なるものは、別段不眠症と云ふ程では無く、只一寸牀に就いて寢られない位の時に試みる方法として種々有ります。即ち之等は一種の催眠術に外ならぬもので有りまして、往々にして效を奏する事が有ります。其方法としてはつまり、種々散漫に成つて居る感想をある一ヶ所に集中するのであります、全く虛心平氣に成り何事をも思はずにぢつとして居る、或は何か或る一物を一心に凝視して居る、殊に何か小き光を發する物等を見つめる、又は精神を集注する爲めに一二三と順に百迄數へて見る、或はいろはを繰返して唱へる、又は牀の中で暫時大きな呼吸を續けると云ふ様な種類で有ります。つまらぬ事の様だが可なり功のあるもので有ります。併し乍ら勿論前に申した原因を去るに如くは無いので有ります。之等にて尚效のなき時、即ち神經衰弱にて不眠の習慣の附いたものには、前述の神經衰弱の療法の外は矢張藥劑によらねば成りま

せん。

不眠に用ふる藥劑としては、第一には臭素加里や臭素曹達が用ゐられます、之れは直接に不眠の藥と云ふ譯では有りませんが、凡て神經の病氣に用ゐて精神の興奮せるを鎭める藥で有ります、殊に神經衰弱には專ら用ゐられて、之れを續けて用ゐて居れば、種々の徵候が自然と少く成り、不眠の如きも漸次恢復し來るので有ります。併し乍ら非常に烈しい不眠症で今夜是非寢なければならぬと云ふ樣な時には此藥は不適當で有ります、服用して寢て直に利くと云ふ樣には成らぬ事が有ります、其時には專門の睡眠藥を用ゐねば成りません、睡眠藥には何かと云ふに「ズルホナール」一瓦を湯にとかして就寢前に用ゐる其他「トリオナール」(一面一瓦)、抱水「クロラール」(一回一瓦)等が適當で有ります。

第五十　結尾

以上五十回に分つて朝起きてから寢る迄の事を一通り申し終つた積りでありますが、或る處は簡略に過ぎ、或る處は岐道に走り、說明の足らぬ所、要領を得ぬ處も多かつた事と思ひます。又氣附きました點もありましたらば、何れ他日項を變へて述べる事と致しまして此度は之れにて結尾と致しませう。就ては最後の附錄として、英國のゼームス、サウエル氏の家庭に於ける衞生規則と云ふものを記して置きませう。國が異なる爲めに風俗習慣も違ひますから、私の申した事とは多少矛盾も有るかは知りませんが御參考には成りませう。

ゼームス、サウエル氏家庭衞生訓

一、一日の中八時間は睡眠に費すべし
二、眠る時は右側を下にすべし
三、終夜寢室の窓戸を開き置くべし
四、寢室の戸の正面には屛風を立つべし
五、寢臺は壁より離れしむべし
六、每朝體溫と同溫の水にて沐浴すべし
七、朝食前に運動を取るべし
八、よく煮たる少量の食物を攝取すべし

九、病氣の媒菌を消滅せしむる細胞を養ふ爲めに適當なる脂肪を食すべし
十、興奮物を用ゐる勿れ、之れ前記の諸細胞を害するものなればなり
十一、毎日戸外運動を爲すべし
十二、犬猫其他の動物を室内に同居せしむべからず、此等は疾病黴菌を傳へ易きものなればなり
十三、成べく田舎に住むべし
十四、飲料水、濕地、下水等に注意すべし
十五、適宜に仕事を變ずべし
十六、適宜に休日を設くべし
十七、功名心を制限すべし
十八、常に精神の劇動を避けよ

（完結）

通俗 花柳病談（續き）

東京醫科大學皮膚科　笹岡芳名君

一、歷史の片影

花柳病學とは一に黴毒學とも申すのであつて黴毒、淋病、軟下疳の三つの病氣の總稱であります、西洋でも東洋でも古來普通の人は何れも黴毒と申して居たようでありますが、これは無理ならぬ言分であつて花柳病學の歷史上未開の時代に在りましては、其病原が定かならぬ所から何れも一毒に基いて種々の症狀を起すものと考へて居たからであります、大空に懸る銀砂子の樣な星は普通人には金米糖を青布呂敷に撒いた如く、どの星も一樣に考へられ、或は大洋の碧水が一物を交へぬ樣に思はれますが、決してそうではない、それ〳〵の顯微鏡を把つて僅かに其一星、一滴を照して見ますと無數の異つたる現象を呈して居るのが證明されるのと一つ事で、學問が發達して參りますと、今まで知れなかつた、いろんな小體までが判るのであります、彗星顯るれば其國亂ると、古人も申しましたが、天文學の發達に由つて、一定の時期が來れば顯はれねばならぬと解決され、宵毎に拜がんだ三日月も今の人には不思議の

念に馳らるゝ人は無い様になつたのであります、又清み徹つた一滴の水にも人の生命を奪ふ所の虎剌拉窒扶斯、赤痢等の細菌が棲息して居るかと思へば慄毛が立つ心地がするではありませんか、花柳病學も實に此數に漏れないのでありまして、西暦一千七百六十七年頃のハンター氏時代には、三病共に一毒に原因するものと考へられたのであります、猶ほ遡つて太古時代には本病が有りしか否かは不明であります、歐羅巴で最も旺に流行したのは十五世紀の終りの頃でありまして西班牙人に起つたと謂ふことであります、次で翌年伊太利に傳播したとの記載があります、恰も此時代には佛蘭西のチャーレス第八世が伊太利のチガ城を包圍せる時に佛兵中に異性の交接に由つて生殖器に疾病が起つたといふことであります、チガペル病の名に歴史の片影を止めて居るのは此事實からで有ります、そうして草葉の陰にすだく蟲の音や、樹々を渡る鳥の聲には國々のなまりはありませぬが、世界の人種間では是と反對に何れの國でも、向上の思想よりしてか、將た劣情よりしてゞあるかは知れませぬが、要するに人の本能たる良心に恥ぢて、お互に己れの惡事を秘して是を人に嫁すといふ觀念よりして、佛人は伊人より傳染したと謂ひ、伊人は佛人より傳染したと謂つて、互に鎬を削つて居るのも客觀的に觀れば一の教訓を與ふる趣味ある現象ではありませぬか、次で獨逸、露西亞、英吉利斯などに傳播した樣であります、まだおかしき事は其元始はコロンブスが亞米利加發見を終へて西班牙に本病を持ち歸りしといふのが多くの説で有る様でありますが、本病の本家爭ひも斯樣の有様で確然たる事は決し惡いと謂つて置くのが、穩當であります。

翻つて支那では千七百年代に西洋人よりして本病を廣東に輸入して遂に四百餘州に傳へたといふ事で有ります。

日本には千七百三十三年外國船が長崎に貿易に來て本病を輸入し、爾來九州、中國等に病毒を蔓延せし

めたといふの他は確然たる記載は無い様であります。

一體傳染病は何の疾病たるを問はず始めて流行する時は頗る病勢が強いもので流行性感冒なる病氣は今日では餘り世人の意に介せぬ様で有りますが、明治の初年始めて東京に流行した時は患者の半數は死亡したとかいふことで有ります、虎列拉、赤痢、ペストなどが目下傳染病の恐るゝものと世人が思ふて居ますが、永久同國民に慣るれば自然と病勢が弱まる様であります、花柳病はどうであるかと云のに、やはり此數には漏れないだろうと推せらるゝのでありますが、今日の狀態では決して輕々しく見做すことの出來ないのみならず、益々社會の上下を通じて甲より乙に、乙より丙に、丙より丁にと傳播して、十戶の村にも猶本病の存在を見るのであつて不知不識の間に民力を弱まらしめつゝあるので有ります。

○○○淋病菌の發見されたのは千八百七十九年でありまして、獨逸のナイセル氏の研究結果に依るものであります。

○○○軟下疳菌の發見は千八百八十九年は同じく獨逸のジユクレイ氏に依つて報告されたのであります。

○○○黴毒菌、とりもなをさずスピロヘーテ、パルリダの發見は一番近い頃で千九百〇五年四月に是も同じく獨逸のシヤウジン、ホフマンの兩氏に依つて發見されたのであります。

以上の如く三者共に其病原菌が明かとなつて參つたのは極々近代のことでありますが、前にも申し述べて置きました様に三病一毒などの事は啻に歷史上の名のみとなつて今日は各個に其本態を知り得るに至つたのであります、隨て治療の方法も新しく又完全に成り得る様になつた次第であります、乃ち花柳病學は數年前其病原體が發見されざる時代に於ては如何に社會に傳播しつゝありしかも推測するに難からんのであります、又學者が如何に忠實に其研究を遂げたかも知り得るのであります、即ち本病の病原體が發見されたるによりて其療法に目下一新紀元を劃

しつゝあるのであります。

（一章、一節、一項たりとも無斷轉載を禁す）

育兒

小兒の泣く事

醫學士　河野衛君

小兒といふものは、ヨク泣くものであつて、「泣く子と地頭には勝てぬ」「小供は泣いて勝つ」とは、昔から人のヨク言ふ事であります、小供の泣くのには實際中々勝てぬ、泣きを止めるといふ事は中々むづかしい事であります、併しながら、此の泣く事に深く注意して居て、之れに應ずるやうに工夫をしたならば隨分泣きを止める事も出來ます、それ故に、母親たるものは、小供の泣き方に深く注意しなければなりませぬ、一體小供の泣きといふものは、マア謂はゞ其言語のやうなものであります、此事がヨク分つて居らぬが爲めに、世間では、泣く事に就て、種々な間違つた考へを持つて居る人が中々に多うあります例へば、小供が泣けばスグに腹が減つて居るのであろうといふので乳を飲ませる、何んでも、乳を飲ませさへすれば、泣きが止るから、泣く度毎に乳を與へるのは中々多く見受けます、實際大抵の人が、小供が泣くとスグ乳を飲ませます、併し是れは育兒上甚だ良くない事であります、勿論おなかのすいた時には、小供は泣くものでありますけれ共、其他色々な場合に於ても、泣くものであります、それ故に、小供の泣く時分には、如何なる譯で泣くのかといふ事を考へて掛らなければなりませぬ、單に乳で以て媾和をするといふのは、甚だ單純な考へで、時としては、害になる事もあります、それならどういふ時に泣くかと申しますと、是れは一々數へ上げると限りがありませぬけれども、先づ第一産まれ落ちた時分に勢よく泣く、愉快な產聲を揚げるですナ、是れ

は、是迄溫い母體の中に生活して居たものが、突然外界の—母體よりも溫度の低い—冷い所に出で來てそうして、光線の刺戟に當り、急に此慣れない感覺を受け不快を感じ、その爲めに泣くのであります此泣きの爲めに、空氣が肺の中に入り、肺は急に膨脹して來まして、血行が迅速となり、身體諸部の働作の具合が、是迄とは大に變つて來るのでありますそれから、小供の身體に何所か濕つて居る所があると泣きます、例へば、繦褓に大便や小便抔が付いて居るのに氣が附かずして其儘にしてある時分には、勿論大變に不愉快を感ずる所から、小供は泣きます或は、衣服の著せ方が惡くて、繦褓の卷き方が粗雜であつたり、衣服の紐を強くしめ過ぎたり抔して、窮屈を感じた場合にも泣きます、又痛みのある時には無論泣きますし、空腹時にも泣くものであります短く言ふと、不快の感じのある時、要求する所のある時凡て泣いて之れを顯はします、それで、小供の泣きは、一種の言語のやうなものであるのであります、併しながら、其泣き方は、原因に依つて色々でありまして、決して一樣ではありませぬ、例へば、腹のすいた時に泣くのと、痛みのある時分の泣き方と、眠る前に泣くのとは夫々違つて居ります、それでありますから、母親たるものは、平素ヨク其子供の泣き方に氣を附けて、其原因をさぐりそうして子供の要求する所に應ずるやうにしなければなりませぬ、泣きさへすれば乳を飲ませるといふ事を止めて身體諸部を檢し、不快を感せぬやうに注意しなければなりませぬ、泣く度每に乳を與へると、第一に乳を與へる時間を守る事が出來なくなり、授乳不規則となり、其結果飲ませ過ぎて、胃腸の具合が惡くなつて來る事が屢ゝあります、殊に母乳が無い時に、牛乳で以て養てゝ行く場合—人工榮養の小兒に於いては、定めの時間外に飲ませるといふ事は、甚だ宜しく無い事であります、病氣殊に胃腸の病のある時分抔には、乳の飲み方に注意するのが極めて大切でありますが、泣けば飲ませるといふ仕方では、病は

中々治り難うあります、要するに、小兒の泣きは、其言語であるといふ事を忘れぬやうに心掛け、單に乳を飲ませて媾和するといふ事をしないで、其原因をさぐるといふやうに心掛けられむ事を希望いたします。

講義

衞生學大要（承前）

醫學士　河野衞君述

牛乳

牛乳は歐米では中々盛んに用ゐられて居ります、獨逸民間では一人一日の用量三合位な割合であるそうであります、日本では近來になつて、牛乳の需用が多くなりましたけれ共、まだ僅かなものであります。

牛乳は肉と同じく極めて有益な滋養品であります、牛乳は價の廉なのと、（尤も日本では割合に價が高くて、西洋では遙に廉價であります、）それから、蛋白質、脂肪、含水炭素、鹽類の如き成分を悉く具へて居りますから、榮養の效果が著しいのであります、母乳の代りに小兒の榮養品として、牛乳ばかりで育てる事も出來ます、大人も一日に一升五合飲めば、是ればかりで生活する事も出來ます、牛乳の成分は、百分中に、蛋白質三分、脂肪三・五五分、糖分四・五一分、鹽類〇・七分を含んで居ります、牛乳は白色又は微かに黄色を帶びて溷濁した液體であります、其濁つて居るのは主に乳球といふものがあるからであります、一部分は「カゼイン」と石灰との化合物の爲めにも濁つて居るのであります、牛乳を搾つてから時を經たものには、乳酸といふものが出來まして、乳酸の爲めに「カゼイン」が下に沈澱して來ます。

牛乳の中に含まれてある諸成分は、牛の種類、年齢飼養法等に依つて、各々違差があります、母牛に種

種の薬を飲ませると、之れが乳汁の中に顯はれて來るものであります、食物もそうであります、又皮膚から吸收せられた品が乳の中に出る事があります、それから牛が結核に罹つて居るときには、其結核菌が屢々乳汁の中にあります。

牛乳には僞せ物が多くあります、普通水を加へて其量を多くしたり、或は牛酪を造つて、脂肪の尠くなつた牛乳を販賣するものがあります、或は其他種々の品を加へた不良牛乳は尠くはありますまい、斯ういふ牛乳の滋養價の尠いのは固よりの事でありますが、此外若し加へた水の中に病原菌が混じて居る場合には、甚だ大なる危險があるのであります。

乳汁の中にて塵埃が混じて居ります、通常五合の乳の中には、平均十二密瓦の塵埃があるといふ事であります、此の塵埃は牛の乳房や搾取人の手の不潔、又は牛乳を入れる器の塵埃、牛舍の空氣中に浮游して居る塵埃抔が入つて來るのであります。

それから、牛乳の中には、各種の細菌が入つて居ります、此細菌の中で最も多いのは乳酸菌といふのでありまして、此れが爲めに乳酸が出來るのであります、其他種々な黴菌があつて、牛乳の性質を變化させるものがあります、それから病原菌で主なるものは、結核菌であります、又外から窒扶斯菌や「チフテリア」菌のやうなものも入つて來て、病の傳染する事もあります。

乳汁を取る所の母牛は健康でなくてはなりませぬ、牛舍は空氣の流通を良くし、塵埃の立たぬやうに、極めて清潔に保つ必要があります、それから牛の飼育には十分なる食餌を與へなくつてはなりませぬ、殊に大切であるのは、乳を搾る時に注意し、乳房を清潔となし、搾取者も手をヨク清潔に消毒し、衣服も清潔なものを著する事にし、乳汁の受器は極めて、丁寧に清洗し、搾り取つた後には、直に冷たい所に運んで、其變敗を防ぐ事に勉めなければなりませぬ。

牛乳には前に申しましたやうな色々な黴菌が入つて居りますから、其儘之を飲用するのは甚だ危險であ

りますから、必らず一旦煮沸殺菌して之を用ひるのが安全であります、牛乳の煮沸消毒には通常ソキスレット氏の器械を用ひます。

善良な牛乳を用ふるといふ事は、實際甚だ困難な事であります、先づ良き乳を得るには、乳を出す所の母牛の健康といふ事が第一肝要な事柄で、それから飼養法、搾取法、運搬貯蓄法等の諸般の條件が完全でなくては到底完全な良い乳を得る事は出來ませぬ牛乳は搾り取られてから、人の飲用する迄には、色色の手を經て來るものでありますから、此間の注意が届かぬと、折角の良い乳も不良な乳になつて了ひます、それから前にも申しましたやうに、種々の僞せ物もありますから、今日吾々が純良な乳を得るといふ事は、極めて困難であると謂はなければなりませぬ。

歐米各國では昔から、牛乳が盛んに用ひられて居りまして、需要額が莫大なものでありますから、牛乳の取扱法といふものは中々にヨク進歩して居ります、一體吾々は牛乳を通常煎て消毒したのを飲みますけれども、煮るときは乳汁に變化を起して來ますから、出來る事なら、健康な牛から、良き乳を、搾り取つて、凡ての取扱法を良くし、煮沸せずして、搾り立てのものを飲用したいといふのが吾々の理想なのであります、所が此れは中々に實行の困難な事でもあり、且つ我國の如きは、牛乳の取扱法がまだ歐米のやうに進歩して居りませぬ所から、衛生上完全な乳といふ保證が出來ないから、止むを得ず煮沸して用ひて居るのであります、米國では搾り立ての乳を直に冷藏器に入れて冷し、スグ之を市中に配布して、其儘飲用に供して居るそうであります、それ故に米國の乳は誠に味が良いといふ事であります、煮沸すると味も變つて來ます、それに健康な牛から出た純良な乳を其儘飲むのでありますから實に良い牛乳であるといふ事であります。

煉乳「コンデンス、ミルク」を搾り立ての乳汁に蔗糖を加へて、一定の方法に從つて、蒸發させますと、

粘稠となります、其粘稠なものを鑵詰にしたものであります、此煉乳にも往々僞せ物がありますから注意しなければなりませぬ。

牛酪、バタ、之れは乳汁の中から取つた脂肪に食鹽を加へて製したものであります、又食鹽を含まぬ品もあります、バタは通常黄色で光澤のある粘稠な物質であります、牛酪も時を經ると、變化するものでありまして、又僞せ物もあります。

それから「マルガリン」と謂つて、牛酪にヨク似た品があります、「マルガリン」は牛乳から造つたものではありませぬので、牛の脂肪から取つたものであります。

乾酪といふものは、二種ありまして、一は乳汁から造つたもので、脂肪を多量に含んで居ります、他の一は脂肪を除いた牛乳から製したものでありまして此れは脂肪を含んで居りませぬ、乾酪には種類が極めて多くあります。

鷄卵

卵は御承知の通りに、殼と卵白と卵黄(黄味)とから出來て居りまして、其割合は、殼六分、卵白三十三分、卵黄一六分であります、卵は黄味も、白味も共にヨク消化せられるものであります、百分中の成分は

卵黄には、水分五四・〇蛋白質一五・四脂肪二八・八灰分一・七卵白には蛋白質一三・三水分八五・九であります、卵の殼には氣孔がありますから、此れから腐敗菌が這入る事があります、又卵の中には稀には「チストマ」といふ寄生蟲の卵を含んで居る事があります。

以上御話し申しました食品は動物性の品であります是れから、植物性食物の御話しを致しませう。

(以下次號)



質疑

問● 貴會益々御隆盛賀し奉り候、私事肥滿で御座いまして常に顔面甚だ赤く御座いますから人々の前には出られず如何にして妾のみは斯くありしかと思ふあまり、はづかしながら御伺ひ申上げ候、又肥滿の者は運動すればよいと申しますが如何なる運動をすれば宜しいので御ざいますか何卒紙上にて御示教下され度伏して願ひ上け候

岩手縣　會員　某

答● 古は美人を形容するに細腰はいよ〳〵痩せて風に堪へざる柳の如くなぞと云ひましたが今日我が醫學の上から見まするど結核體質を意味した迄の事である、昔は美の觀念を誤解して居たものと思はれます、眞美と云ふ美は骨格飽くまでたくましく筋肉之に準じて血色艶麗なるを云ふので外國では美人と云ふ美人は凡て此の如き體質を備へたものを云ふのであります、肥滿は體内に病魔の伏在するのではなくして心神爽快のときに必らず來るべき生理的の現象なれば少しも心配するには及びません、病的に肥胖病と云ふものはありますけれども多くあるものではない、凡て肥滿性體質の人は飽食を禁じ菜食を取り運動宜しきを得、適當の睡眠を制限なし、アルコホル性飲料を避け一週二三回の温浴等は推賞すべき事柄である、亦便秘勝になるは肥滿家の常習でありますから緩和の下劑を與へて適當の通痢を計るのも亦療法の一助となる、運動と申しましても特別の方則に據らずとも朝夕野外の新鮮氣中に散歩するなどは最も適當なる事と思はれます

問● 拜啓去る四月の本誌にて肺病患者の「レスピラートル」帶用は至極必要の旨御回答下され難有

存じ奉り候今回 尚又御伺 ひ申上げ候は夏期は風りとも塵埃の飛散せざる場所卽ち田野山林河邊の如き箇所を散歩するには該品を用ゆるに及び申さず候哉、又候御伺ひ申上げ候儀は本誌第二百二號の質疑欄に肺結核に關係なくして喀血する肺二口蟲病と云ふのがある趣き御記載之れあり候就ては肺二口蟲病は全快すべき病に候か否や肺結核の如く不治の症にあらざるか是亦何卒御回答下され候樣願ひ上げ候謹言

山形縣北村山郡　阿部　薫

答● 仰せの如く前々號にお答へした樣な場合を除くの外塵埃の飛散せざる田野山林河邊を散歩の節は用ゆるに及びません

又御質問の肺二口蟲病(一名肺ヂストマ)は我國に於て去る明治十一年ベルツ氏が始めて發見せられしものにて肺に寄生する處の一種の寄生蟲にして此の二口蟲は朝鮮及び日本内地臺灣に多く日本に於ては各地に散在すれど殊に熊本、岡山、長野、宮城の諸縣には最も多くして不潔なる水、飲食物から人體に入ると云ふ事でありますが肺結核と異なる點は明瞭で患者は數年數月の間血痰を喀出するにも拘はらず身體の榮養は比較的可良で醫者が診ても只一般に貧血を呈して居ると云ふの外胸部の症狀は多くは陰性であります、且つ最も確實なるは喀痰の顯微鏡檢査である二口蟲病にあつては該蟲の卵を見ることが出來るのです、本病の治癒は至難なれども比較的無害にして決して之れがために直接生命に危險を及ぼすものではありませぬ

〰〰〰〰

問● 貴會彌々御清榮賀し奉り候陳者 私 親戚の者本年二歳の女子面部に少さく薄くホヤケ有之候女の事故困り居り候何とか取り除く療法御座候はゞ何卒御示教に預り度右御願ひ申上候早々

愛媛の一會員

答● 他に病的變化があれば格別のこと、さもなくば特別の處置をする必要もありますまい、又無害に

取除く方法とても御座いませんが、畢竟平素の攝生に注意されなば年を經るに從つて漸々薄らぐならむと考へられます



雜報

○コッホ博士

細菌學の泰斗コッホ博士は、觀光の目的にて本邦に來遊を思ひ立ち、夫人と共に曩に伯林を發し米國を經て、愈々去る十二日サイベリヤ號にて無事横濱に到著せられたり。(本誌の冒頭に掲げしはコッホ先生の像なり)

博士は、今を去ること三十二年前、脾脫疽の病原菌を發見し、頓に名を揚げて以來、創傷傳染病、結核虎列剌等の病原を研究發見して、醫界に光明を與へたる人なるが、今や六十を過ぎたるにも係らず、孜孜として研究に從事し、最近の數年間に於ては、二度までも亞弗利加の蠻地にわけ入りて、睡眠病の研究をなし、其病原菌を發見して、醫界のために大なる貢獻をなしたり

今や世界の醫學界は、細菌學の進歩によりて、一大革明を生しつゝあるの狀態なり、斯かる狀態にまで導きたるは、コッホ博士の效、其重きを致せるを思へば、單に醫界の偉人たるのみには、とゞまらず、又吾等人類の大恩人なりと言ふべし

今博士、遠く海をわたりて、我が國に來遊せらるゝ、我等は斯かる碩學の高風に接し仰慕畏敬の念禁ずる能はざるものあり

右につき、醫學及びこれに關係ある各學會聯合發起者となり、東京に於て歡迎會を開きたるが、其發起者となりたる各學會は左の如し

東京醫學會　日本藥學會
日本神經學會　日本外科學會
東京動物學會　癌研究會
日本眼科學會　赤十字社病院研究會

順天堂醫事研究會　日本皮膚科學會
內科學會　獸醫學會
東京顯微鏡學會　日本小兒科學會
東京植物學會　大日本私立衛生會
大日本耳鼻咽喉科學會　傳染病研究所同窓會
陸軍軍醫學會　日本婦人科學會
花柳病豫防會　成醫會
日本衛生學會　齒科學會
日本解剖學會　日本消化器病學會
齒科醫會　農學會
海軍軍醫會　テーデー會
東京醫會　國家醫學會
齒科醫學會

歡迎會準備のため、各學會より會長の外二名乃至五名の委員を撰み委員中より委員長一名及び專務委員若干名を撰み、諸般の事務を處理せしむ

委員長　石黒忠悳
幹部委員　飯島魁
同　本多忠夫
同　時重初熊
同　岡玄卿
同　川上元治郎
同　木庭榮
同　青山胤通
同　北里柴三郎
同　平井政遒
同　森林太郎

事務委員分擔

式場委員　石原喜久太郎
同　池口慶三
式場委員　長與稱吉
同　梅野信吉
同　矢部辰三郎
同　野村虎良
同　照內豐
同　山田鐵藏
同　三島通良
同　淺田繁太郎
同　志賀潔
同　佐藤信郎
同　杉本東造
同　時重初熊
庶務委員　遠山椿吉
同　大澤岳太郎
同　川上元治郎
同　渡瀨庄三郎
同　橫手千代之助
同　高木喜寬
同　都築甚之助
同　北島多一
同　富士川游
同　三島通良
同　宮島幹之助
同　平井政遒
同　南大曹
同　日高昂
同　宮本叔
同　鈴木重道
會計委員　細野順
餘興委員　岡田和一郎
同　吉澤環
同　遠城兵造
同　葛目猪太郎
同　中泉行德
同　丸東
同　笹川三男三
同　木庭榮
同　柴山五郎作
同　佐藤恒祐
同　樋口芳太郎
接待委員　入澤達吉
同　須田卓爾
同　菅野徹三

歡迎會は、六月十六日、午後二時より擧行せられたるが其次第は左の如し

第一　講演會(上野公園東京音樂學校校堂)
コッホ氏紹介辭
歡迎の辭
式辭
講演(通譯)
謝辭
第二　觀劇會(木挽町歌舞伎座)
演劇(吉野山道行、曾我討入)、歌舞

尚ほ其詳細に就ては、更に次號に於て報道する所あるべし

○衛生戰史編纂の成績

我陸軍に於ける日露戰役衛生戰史編纂事業は森醫務局長就任以來事務大に進捗し今日の處にては附錄插畫たる五百餘頁の寫眞帖は既に全部完成を告げ尚ほ凡ての治療成績統計及び諸勤務に關する經過及び今後の方針等は略終了し又外科眼科の治療記事も其半ば完了の運びに至りたる由にて殊に過日寺内陸相は四十二年度内に全部の完成を圖られたき旨の希望を局長を通じて各委員に洩らしたる由なれば明年度内には完全なる衛生戰史の完備を見るに至るべく日淸戰役當時の如き全軍に僅々百餘ケ所の野戰病院を建てたるに過ぎざるも猶其戰史編纂には多數の日子を要して漸く四十年度に完了したる程なれば今回の日露戰役の如き全軍を通じ五百有餘の病院を以て百六十餘萬人の患者を收容したる事とて從て其編纂は一層困難なるも各委員は目下全力を盡して之れに努めつゝあれば豫定の如く明年度中には完成の運びに至るべく當事者の勞や多大なりと云ふべし

○東京市と撤水

東京市が東京府令に依り規則上撤水すべき街路の總坪數は實に八十萬坪の多きに達し居るも目下實行し居る所は僅かに其内の四十萬坪にして殘る四十萬坪は來る明治四十三年三月末日迄其施行猶豫を請ひ居る始末なるも現今の水道給水組織にては單に之を飲料水又浴場等に使用せしむるに過ぎずして些も撤水用に供給することを許さゞれば之を使用せんこと不可能なり去れば市内の各所に井を穿ち又濠溝河川に依りて其需要を滿たさんとする時は從來の經驗より

するも撒水する時間よりも却つて汲水する爲めに多くの時間と勞力とを費し夫が爲め街路に撒水する傍より忽ち乾燥し來れば一時濕潤する地上も長き時間其效を保たず故に夏期の如きは一層乾燥の度を高むれば少しく風の吹き加はる時は全市をして紅塵萬丈の巷と化せしむ實に大帝國の首都としては其美觀上よりするも衛生上よりするも到底其失態たることを免れざれば市の當局者には大英斷を以て來る四十五年の大博覽會開設迄には是非共其改善を企圖し居れるも結局は經費上の問題に歸著し之が實行を見んとするには少くも二百萬圓以上の巨額を要する由なれば今日の狀態より察すれば東京市民の負擔額は是又輕からざるべしと

○麥食の奬勵

近來地主の負擔加重するに隨がひ小作料著しく騰貴し殊に米田の如きは全收穫の八割以上を地主に徵收せらるゝ結果小作人は纔に間作の米收穫を以て生活する有樣なるが而かも麥價は輓近年々低落の傾向ありて試みに過去の統計を檢すれば明治八年以後十ケ年間に於ては米價の約六割相場を維持したりしに十九年以後の十年間に於ては平均四割八分の割合に低落し二十九年以後の十ケ年は更に四割の平均と下り卽今米價一石十七圓に對し麥は實に一石六圓五十錢見當なりとす若し此狀態を以て今後も推進まむには地方小農民の生活は益々苦境に陷るべくして實に寒心すべきものあり翻つて米の需要を見るに內地平年の收穫先以て四千萬石を下らず外に外米の輸入は平年に於ても動もすれば三千萬圓を超ゆること珍らしからず價彌々貴くして需要益〻多きを加ふ是一は人口の增殖にも依るべけれども又畢竟都鄙一般奢侈に趣き麥食者の如き年と共に減少し行けること其主なる原因なるべし現在本邦麥の收穫高は大麥大約八百餘萬石、小麥大約四百萬石、主として食用となる裸麥は大約六百萬乃至七百萬石の間にして米に對し約そ一割五六分にしか當らざるが昨今一面に麥食衞生論も盛んなる折柄若し國民一致して麥食奬勵に

努めなば啻に輸入米を減退するのみならず一は勤儉の美風を養ひ國富衛生兼ね得る處少からざるべしと

大日本婦人衛生會記事

○本會六月例會

本月六日(土曜日)午後一時半より神田の共立女子職業學校に於て例會を開く、本會總裁東伏見宮妃周子殿下は御用掛上野夫人を從へられ最と美しき御和裝にて御臺臨あり、暫時御休憩の上副會長濱尾夫人の御先導にて會場に成らせらるゝや一同立て敬禮をなし、夫れより富士川ドクトルは前回の續き「身體及其保護。顏貌と病氣」の題下に人間の氣分に就て學問上と實驗上よりの所見を詳細に陳べられ凡そ人の顏貌は氣分に關して四十八通り以上の變化がある總て其の感情と筋肉の作用に由て變ること、何々病氣の人は何樣の顏貌をなす、何々の病氣は彼樣な顏貌を呈するものなりとて諸種の顏貌等の圖畫を揭示して說明せられたるが何時もながら興味ある講話なりし。次で岡田博士は「整鼻術」てふ題にて先づ各人種の鼻形の系統より鼻と美と、鼻と人の性質との關係、パラフィンを注射して手術する整鼻術の容易にして而も人體に害なく其の效力偉大なることを種種の鼻形の圖畫及び寫眞、蠟細工の鼻形を示して說かれ、一見歐洲人より侮蔑を招くが如き鼻若くは疾病に因て形狀を損したるもの抔は速かに治療を乞ふて自個の幸福を增すと共に社會の美觀を保つ必要あり、又手術を行ふに鄭重を缺き黴菌の侵入するが如きことあらば寧ろ舊の儘になし置く方却て安全なるべければ希望の人々は信用ある醫師に依賴すべし云云との講話ありて閉會、殿下は暫時別室に御休憩の後午後四時前御機嫌麗しく御歸邸遊ばされたり、當日の傍聽者は無慮三百餘名にて頗ぶる盛會なりし、又役員の出席者は左の如し

鍋島　榮子　濱尾　作子　小川　幸子　羽田三緒子
岡田　德子　田村喜代子　長谷川仲子　宮下　咲子
岡山とし子　緒方　悅子　土肥多越子　松平　芳子
南部　限子　吉武輝枝子　高木　錸子の諸氏

○山形支會總會

五月十八日午前十時より千歳公園内稲松閣に於て本會第八回總會を開く當日は總會に兼ね副會長岩本しげ子君の送別會を開けり、來會者五十餘名席定まるや開會の辭、次で四十年度會計庶務の報告、役員撰擧等にて式を終り、夫より送別會に移り友田醫學士會員一同に代りて送別の辭を述べられ、岩本副會長の答辭ありて後、一同庭園に於て紀念の撮影をなし宴會に移る、浪花節の餘興などあり各自歡を盡して散會せしは午後五時頃なりし、來賓には津田女子師範學校長古閑友田稲田の講師等なりし、因に岩本しげ子の君には當日金參圓を寄附されたりしと

▲同會の役員改選

會長	馬淵よし子		
幹事	佐柳千代子	津田通子	國井よしな子
	高木孝子	鈴木まさよ子	佐藤たみ子
評議員	友田ため子		
	關根たか子	長谷川こと子	村井こと子
	長谷川ゆう子	三浦しげ子	關原かめえ子
	古閑こと子	遠山そめ子	瀬川まき子
	江尻しむ子	稲田こはま子	西野きぬ子
	坂元せい子		

○地久節祝賀式

五月二十八日午後一時半より白山公園内偕樂館に於て新潟婦人敎育會と新潟支會と聯合の上地久節祝賀式を擧行せり、出席者は來賓及び會員にて約百餘名先づ婦人敎育會々長高田せん子の君は開會の辭を陳べられ、次で數名の祝辭ありて式を終へ、餘興に蓄音器などありて各々茶菓を喫し談笑の裡に閉會したるは午後五時頃なりき

○本會入會者

○事務所申込

●日本橋區小舟町一、平沼方　通常會員　宇津木それかし

●秋田縣大阪町　通常會員　横山壽子

○横井忠幽氏紹介

●臺南市安海街南部治療院　通常會員　南部好子

○飯泉はん子紹介

●本郷區千駄木町五十、太田方　通常會員　辻花子

○原政子紹介

●神田區南甲賀町八　通常會員　小野寺つね子

○山形支會入會者

○佐柳幹事紹介

●　特別會員　坂元せい子

○津田幹事紹介

●　特別會員　丹生きく子

○高木幹事紹介

●　通常會員　大芝信子

○轉居

●丹波國稲知山村我井天田三五一へ　田中直子

●府下渋谷村下渋谷居村三八九へ　清水とし子

●兵庫縣御影町郡家村へ　野口眞子

●京橋區本材木町三ノ九へ　内田なか子

●芝區二本榎一ノ八一へ　大澤うた子

●神川區錦町へ　佐々木かく子

大日本帝國政府及
佛、伊、瑞、白、加、露、印諸國 專賣特許

醫師岡崎桂一郎先生發明

商標登録 DIGESTIN

チゲスチン

一名（蛋白消化素）

▲世界獨歩の「チゲスチン」は植物性に▼
▲して諸種の蛋白質（肉類、膠質、牛乳、卵白、豆乳、纖維素）を各▼
▲性に於て消化する腸胃の最新藥!!▼

● 粉末壹オンス入　金貳圓廿錢
● 同半オンス入　金壹圓廿錢
● 錠劑三十粒入　金參拾錢
● 同壹百粒入　金九拾錢

▲▲チゲスチンは麹菌の新種なる「岡崎菌」の分泌する最近發見の釀酵素なり
チゲスチンは食物の大成分たる蛋白質の消化不良に起因する疾病に對し
（一）世に消化藥と稱する「ペプシン」及「パンクレアチン」を用ゆるも猶奏效なきもの
（二）胃腸障碍の爲め同化作用を營むべき胃液、膵液及び腸液中に消化釀酵素缺乏せるとき
（三）身體衰弱の爲め胃腸、液中に消化釀酵素の減少を來したる際
以上の場合に於て必要缺くべからざる消化の特效ある新藥なり

▲チゲスチンは蛋白質の測定材料たるゲラチンの百倍量を各性に於て約一時間以內に液化し顯著なる「ピユレツト」反應を呈す故に總の滋養食料中に多量含有する膠質及生膠組織も亦容易に消化し得べし是に於て日本人の常食たる魚肉には膠質及生膠組織に富を以て本劑は克く之を消化す低級に分解して體力を補給すべし則ち日本人適切の要藥たる論を俟たず

▲チゲスチンは滋養品の主宰たる牛乳百倍量を僅かに十分乃至廿分間に溶化し次で「ペプトン」化せしむる效力を有す眞に理想的の牛乳消化藥なり

▲チゲスチンは效力絶大なる新藥にして胃腸消化不良及一般腸胃疾患又重病後の恢復期等に消化機の勞苦を省減し不消化性の蛋白質物を完全に溶解するを以て健康の人も榮養を補給し病魔に抵抗する氣力を養ひ得べし

▲チゲスチンは全國有名なる藥店にて販賣す御便宜にて御購求を乞ふ

最近發賣の豫告

● 『チゲス』精 一名（蛋白消化液）

▲「チゲス」精は「チゲスチン」の水溶液にして醫家及び藥業者が水劑となし用ふるに適する而已ならず又總ての飲料に和し用ゆる爲め便宜上特製したるものなり

▲「チゲス」精の用法及び醫治效用は「チゲスチン」に毫も異なることなし

● 說明書は申込次第進呈

發賣元 東京市日本橋區本町三丁目【電話本局一四四三番】
電信略號【エンジヨ】
振替口座【貳四壹參】
合資會社 圓城商店

販賣代理店 東京市神田區淡路町一丁目【電話本局壹〇九六番】
電信略號【〇フウ】
振替口座【壹〇壹六八】
風雲堂 後藤節藏

インファンチナ

小兒を完全に發育せしめんと欲せば牛乳に之を加へよ

醫學博士弘田長氏曰く（上略）予も亦久しく完全なる小兒營養品を求めつゝある者の一人なり、而して坊間販ぐ所のもの一長一短彼に可なる所あれば是に否なるあり撰擇又撰擇絶えて我意に滿つる製品なきを慨したりき、然るに客歲官命を帶びて歐州諸國を巡回したる際、測らずも完全なる小兒營養品を得たり、これ即ちドクトル、タイン、ハルト氏可溶性小兒食品「インファンチナ」なり（中略）其化學的集成を見たるのみにして既に本品が如何に適當に配合せられたるものなるかを知るに足る其消化性蛋白質に富めるとや、其含水炭素の大部分の可溶性なるとや、一徒に多量の脂肪を含まさるとや、鹽類中にも小兒の發育に至要なる燐酸鹽類を適當に含むとや、何れも是等營養的人工製品を求むる者の理想とする所ならざるなし、而て更に之が用法を見るに小兒の年齡に依り一定量の牛乳と水とに和して用ゆべく定めたり、これ人爲の力のみを以てしては到底不滿足にして天工を奪ひ能はざるとを自認し、一半は天然物を以て之に充て其質を更めて天工に近かしめむと試みたるもの、即ち牛乳の性質を變せしめて人乳、就中小兒の生母の乳汁と同一ならしめむと欲したるなり、其考案の巧妙にして而かも實用上些の遺憾なき、寔に感嘆に値すと云ふべし、（中略）予も亦之を實驗したるに消化不良に罹れるもの又は現に下痢ある者の如き本品を用ゆるに依りて之を制止す

「インファンチナ」の分析表及用法用量は現品に附したり

「インファンチナ」は百瓦入三百瓦入五百瓦入の三種とし何れも鑵入として發賣せり各地の有名藥舖にて販賣す最寄の藥店になきときは直接照會を乞ふ

發賣元　東京市日本橋區南茅場町二番地　三共藥品合資會社

（後附の二）

私立大日本婦人衞生會

山形支會規則

第一條 本支會は私立大日本婦人衞生會々員山形市在住者を以て組織す●第二條 本支會に會長副會長の外幹事四名評議員若干名を置く會長副會長は公撰し幹事評議員は會長之を選任す 役員の任期は一ヶ年とす●第三條 本支會は毎月一回(第一日曜日)講話會を開き毎年一回(五月)總會を開き講話の外役員の撰擧庶務會計の報告をなす●第四條 入會せんと欲するものは宿所姓名並に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を賴すべし本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし●第五條 本會々費は會計幹事に納むべし但し六ヶ月又は一ヶ年分新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし●第六條 服裝は精誠質素なるを要す上著羽織は絹布を用ゆるを禁す

明治三十三年二年四日創立

事務所山形市旅籠町新築四通二百八十九、北島氏方

山形支會

私立大日本婦人衞生會

宇都宮支會規則

第壹條 本支會ハ私立大日本婦人衞生會宇都宮支會ト稱ス●第貳條 支會ニ會長一名副會長一名評議員拾五名幹事四名ヲ置ク會長副會長ハ公撰シ評議員幹事ハ會長之ヲ撰任ス各役員ノ任期ハ一ヶ年トス●第參條 毎月壹回(第一日曜日)講話ヲ開キ毎年五月講話ノ外役員ノ改撰庶務會計ノ報告ヲナス●第四條 入會ハ宿所姓名ニ第五條ノ通リ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込ミ又ハ會員ニ紹介ヲ依賴スベシ本支會ヲ脫會又ハ本會ヲ退會セントスルトキニハ其旨事務所ニ届出ヅベシ●第五條 本會々費ノ外別ニ支會々費ヲ要セズ會費ハ一時ニ六ヶ月又ハ十二月分、新タニ入會ノモノハ其月ヨリ六月又ハ十二月迄ノ分ヲ納ムベシ●第六條 本支會ハ別ニ支會々員ヲ置キ支會會費トシテ一ヶ月金五錢ヲ納ムルモノトス●第七條 講話會ニ出席ノ節ハ成ルベク家族又ハ知合ノ婦人ヲ誘引シ傍聽セシムベシ●第八條 服裝ハ精誠質素ナルヲ要ス上著羽織ハ絹布ヲ用フルヲ禁ズ●第九條 特ニ支會規則ニ揭ゲザルモノハ本會ノ規則ヲ準用ス

明治三十四年二月三日創立

事務所宇都宮市傳馬町三十三番地、行森氏方

宇都宮支會

幼兒教育夏期講習會

期間　明治四十一年七月二十一日より八月三日迄休みなし十四日間

會場　東京女子高等師範學校附屬幼稚園

講習料　金貳圓也但し會員は二割引

申込　講習料を添へて直接本會へ申込まるべし

◉兒童の感情及意志　東京女子高等師範學校教授　黒田定治

◉保育思想の過去將來　東京女子高等師範學校教授　中村五六

◉科學的教育學として幼兒教育　東京女子高等師範學校助教授　和田實

◉運動及唱歌遊戯の實際に就て　東京女子高等師範學校保姆　西森釧

◉談話の實際に就て　東京女子高等師範學校保姆　川口得

◉保育上に於ける自然物の應用　東京女子高等師範學校保姆　池田トヨ

◉音樂　東京女子高等師範學校囑托　中村コウ

證明書　志望の向には出席の度數を案じて授與す

寄宿所　本講習の爲め地方より特に上京せらるゝ方にて宿泊所に御困りの方には本會は可成的便宜を計りて責任ある宿舍を紹介致す可く候尤も此場合には成る可く前以て御照會ありたし

東京女子高等師範學校内フレーベル會

醫學博士 志賀潔 序
醫事新聞社長 藤根常吉 校閲
赤井稻藏 著

胃腸養生法

全一冊
正價六拾錢
郵稅六錢

常に胃腸の養生を怠らざるときは如何なる病患にも罹ると稀なるべし、蓋口は百病の門戸にして胃腸は最も始めに侵され、身體の健全漸く常を失へば病患此機に乘じて侵襲を逞ふする者なれば也、本書は此主趣に基き、先づ胃腸に於ける消化作用より、食餌即動物性食物及植物性食物の養價に就き一々其分析表、撰擇法、鑑別法、貯藏法、調査法を示すのみならず、嗜好品、飲料水、乳兒の養育法も亦之を擧ぐ、斯の如くにして猶且胃腸の侵さるゝに至りては之に應ずるの方法として、胃腸病の種類に從ひ食餌の適否を說き、且水治法、按腹法、轉地療養等の應用を示す、而して全篇の行文は談話の體を取りて一般の人々に領解し易からしめたるを以て、一たび之を繙きて朝夕食餌に注意するに至らば、獨り其人の健康保全の幸福のみに止らざるべし

楠田謙藏 述
鈴木准二 編
挿圖十二個 總ふりがな附

婦人之衞生

全一冊
正價四拾錢
郵稅四錢

此書は婦人の月經時、婚嫁時、妊娠時、分娩時、產褥時並に其固有の疾病時に當りて注意すべき事柄を漏すことなく記述し之に附するに小兒の保育上の注意疾病時の注意を以てしたるものにして婦人は此記述に準して自愛するときは庶幾くは其健康を保持し且愛兒を適當に保育することを得ん此書に類したる名を負せて世に出すところの書冊に比すれば其所述に於て其行文に於て其優美にして卑猥ならざる點に於て少しく撰を異にするところあるを信す

(後附の六)

發行所 東京市本郷區龍岡町
振替口座四一八番
電話下谷一六七二番
吐鳳堂書店

私立大日本婦人衛生會新潟支會規則

●第一條　本會は大日本婦人衛生會に屬し婦人衛生の研究を目的とし兼れて一般慈善事業を爲すにあり●第二條　當支會の會費は左の六種とす終身會員一時限り出金貳拾五圓特別會員毎月金參拾錢通常會員同金貳拾錢支會員甲毎月金拾錢乙同金五錢●第三條　入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし●第四條　會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衛生雑誌を配布す●第五條　會費は雑誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衛生慈善資金とす●第六條　支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す各役員の任期は一ケ年とし再撰するを得役員は總て無給とす●第七條　支會は毎月六日通常會を開き衛生及び慈善に關する演説をなすべし●第八條　毎年一月總會を開き支會の要務を擧行す●第九條　本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし●第十條　天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄贈を募ることあるべし會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は贊成員となすべし●第十一條　一般慈善事業の贊助天災事變の救濟の事務は役員會の決議によりて實施するものとす●第十二條　支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は可成く綿服を着用すべし●第十三條　特に本規則に揭げざるものは私立大日本婦人衛生會の規則を準用す

明治廿九年四月創立

事務所新潟市本町通十三番戸中村しけ子方

新潟支會

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

明治四十一年六月十六日印刷

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會會員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ





○本會徽章料左の如し

○通常會員章
第三號
メッキ製拾貳錢、送費六錢

○第二號
正銀製四拾錢、送費六錢

○終身及特別會員章
第一號
七拾錢（黑塗箱入送費九錢）
六拾錢（桐箱入送費六錢）

第二條　會員章は本會竝に支會の集會に出席する場合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

○入會注意

○御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるべし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收人差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料をも御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京麹町區富士見町郵便局）宛振出あるべし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

○會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌を進呈す

本誌一部定價貳拾錢

發行所　東京市麹町區富士見町二丁目卅二番地　私立大日本婦人衛生會（振替貯金口座一〇六〇〇番）

編輯兼發行者　東京市下谷區竹町五番地　齋藤清之丞

印刷者　東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地　今井甚太郎